

藤原定家全歌集全句索引 本文篇

拾遺愚草 上

百首 誦

初学

二見内位上人

大輔

閑居

早卒二度

花月

十題

号合

院初度

同千五百番

内大臣家建保三年
内裏名所院建保四年
関白左大臣家貞永元

已上千五百首

初学百首

養和元年四月

詠百首和歌

侍従

春廿首

3
いつる日のおなし光によもの海の浪にもけふや春はたつらむ
あやかすみへたつるからにはるめくはと山や冬のとまりなるらむ
盟鳥のはつねをまつにさそはれてはるけきのへに今世もへぬし
ゆきの内にかておらましくくひすの薔を梅のしるへなりけれ
梅花こそまをなへてふく風にそらさへ匂ふはるのあけほの
なか／＼によもたにはへる梅花たつねそわゆる夜半の木のものと
はる雨のはれゆくそらに風かけはくもともにもかへる雁かね
春雨のしくくふれはいなむしる庭にみたるう青柳のいと
よしの山たかねのさくらさきそめて色たらまざる峯のしし雲

九

花ゆへに春はうき世をおしまるゝおなし山ちふみまよへとも
いたしへの人に見せはやくくら花誰もてこそは思ひをまけめ
あつさる春は山ちもほとそなき花の匂ひをたつね入とて
年をへておなし梢づく花のなごためしなきにほひなるらむ
みやへはなへてにしきとなりけりさくらそらぬ人しな件は
中／＼におしきもとめしわれならで見え人もなきやとのさくら
風ならて心とをられさくら花うもふしにたに思ひをくへく
春のよにはなるこまは雪とのみらりか小花に人やまとへる
みなかみに花やちるらむよしの山にほひをそふるなきの白いと
をしなへて峯のやくらやちりぬらむ白たへになるよもの山かせ
うらみてもかひこそなけれゆく春のかへるかたをほそいとしらねは

三二

夏十首

一 おしむにも心なるへま袂さへ花のなごりほとまらざるらむ
二 卯花に夜のみかりをてらせて月にかはらぬ玉川のさと
三 とめをきしうつりかならぬ橋にまつこひらるゝほととすすかな
四 橋の花もる風にあらねともふくにはかほるあやめ草哉
五 五月やみくら小の山のほととすすはのかなるねににる物をそなき
六 すきぬるをうらみほんとし郵公なきゆくかたに人もまつらむ
七 さみだれたけ小も暮ぬるあすか川いとふらせやかはりはつらむ
八 五月雨にみつまみまざるまこも草みしかくてのみあくる夏の夜
九 そま河せうきねになるういかたしは夏の暮こそすしからとめ
夏の日のお山みらるしるへにて松の梢に秋風をふく
秋廿首
をしなへてかはるいぢをほそきながら秋をししする萩の上風
うらみをやたらそへつらむたなはたのあくれはかへる雲の衣に

三三

風ふけはえたもとを、にそく露のちるさへおしき秋はきの花をみなへし露をほる、おきふしに契りてめてし風や色なる

霧かきほきの下葉に月さえて小鹿なく也秋の山ざと

つきかけをむくらのかとにさしそへて秋こそきたれとふ人はなし

天のほらおもへはかほる色もなし秋こそ月の光なりけれ

あきの夜のかみと見ゆる月かけは昔のそらとつすせけれ

うきくものほるれはくもる涙かな月見るま、の物かなしさに

露の身はかりのやとりに消ぬとも今夜の月のかけはわすれし

心こそもちしまてもあくかるれ月はみぬ世のしるへならねと

ふす床とてらす月にやたくへけむ千里の外とはかる心は

しほかまのうらの浪かせ月さえて松こそ雪の絶まなりけれ

秋の夜は雲ちとわくを雁かねのあとかたもなく物そかなしき

みにかえて秋やかなしき曇よなしく、こゑとしまさるらむ

霧なからおりやをましましくの花しもにかれては見るほともなし

さきまざるくらゐの山の菊のはなき紫に色をうつろふ

もみらせめときほの山にやとも我わすれて秋とよまにくらさむ

もみらせううつるはかりにそめてけりきのふの色を身にめしかと

ひきまぐるいりあひのかねもとと絶ぬけ小秋風はつきけてめとて

冬十首

はれくもりをらそを冬もしりをむる時雨は暮の紅葉のみかは

冬かすしらすしけるみ山のあとつらら冬のくるにはあらはれにけり

しくるも冬とはかはらぬいたまより木のほつ月のもるにそありけ

池水にやとりてさへそおしまるゝをしのうよわにくもる月かけ

三三

三四

三五

三六

三七

三八

三九

四〇

四一

四二

四三

四四

四五

四六

四七

四八

四九

五〇

五一

五二

五三

五四

五五

とも千鳥なくすのはまの濃風はをらやえまざる在明の月

をとたえずあらふうとく襟のはのほらはぬ袖となにぬらすらむ

ふみわくる道ともしらぬ雪の内にけりふりもたゆる冬の山ざと

花とまら月とむとすくしきて雪にそつもる年ほしらるゝ

つらゝぬるかけひの水はたえぬれとおしむる年のとまらざるらむ

如何せむ袖のしからみかけをむる心のうちとしらる人そなき

これやさほそらにみつなる悪ならむ悪たつよりくゆるけりよ

袖のうへはけたりもみまもくろはてと悪けしのはむかたなかりけり

もろこしのよしの山のゆめにたにまたみぬ悪にまといぬる哉

いかにしていかにしらせむともかくもいはへてのこのほをか

日にそへてますたの池のつゝみかねいひ出とてめぬろゝ袖かな

夢の内をこれと見えし傍をこのよにいかて思あはせむ

すまのうらのあまりもゆる思ひ哉しやく煙人はなひかて

あつたらまゆみつきろつきもせず思われともなひく世もなし

ちつかまでたつるにしまいたつらにあらはて朽なんんを惜けり

はかなくてすくる此よと思しはたのめぬほとの日教なりけり

や夜衣わからぬ袖にとくめをきて心そはてはうらやまれぬろ

きみかたのいのちをさへもおししますはすらにつらさをなげからま

むすひけん音をつらき下紐の一夜とけりる中の契りと

うしとてもたれにかとむつれなくてかほろ心をさらはをしへよ

つらさへ君かたのそな門かるゝむくひにかゝる患もこそすれ

もろともにあなのさうはら道たえてたふく風のそとにまけとや

五六

五七

五八

五九

六〇

六一

六二

六三

六四

六五

六六

六七

六八

六九

七〇

七一

七二

七三

七四

七五

七六

七七

思いてよすまの松山すままでも涙さしとは契りよりや
こひわたるさのふなはしかけたえて人やりならぬをのみをなく
如何にせむうまにつけてもつらまにも思ひやむへき心地こそせぬ

雑世首

神祝

かすか山谷のふちをみたらかへり花さく春にあふよしもかな
おもひのみおほほらのへに年へぬるまつことかなへ神のしるしに

秋敷

なれきてちのつく水にしるま裁まつひらくへきむねの連は法師
品

うき世にはうれへの雲のしけくれは人の心に月をかくる、尋常品
さためけるけとけの道とるへにて今ほうまよまとはすもかな

神カ品

身にしめてかきとく法の花の色のかかさあせいほしる人もなし 兼
玉品

玉品

きこはつる花のみのりのすまにこそやたのまける身ともしりぬれ
勸菜品

無常

なれめてもすたためなき世のかなしきは時雨にくもるありあけのそら
水のうへに思なすこそはかなけれやけて消るをあげと見ながら

別

わかれても心へたつたひ衣いくへかきなる山地なりとも

旅

つくとわさめてまきは浪まくらまたさよふかさ松風のこえ
ゆまかへるゆめらとたのむ宵ことばいや遠さかる宮こかなしも

5

七八

七九

八〇

八一

八二

八三

八四

八五

八六

八七

八八

八九

九〇

たつたひに心ほそしやもしけやくけふりはたひのいほりならわと
ゆまかへりたひのそらにはねをそなく雲井の雁をよそに見しかと
たひのそらをとすて山の月かけよすみなれてたになくさみかせし

祝

きみか世は案にあさひのさしなからてらす光のかすとかをへよ
わかきみのみよとこたへむ世中らとせやなに人もたつねは

物名

さしくし ひか付
神山にいくよへぬらむさか木はのひさしくしめをゆひかけてける
はんい したかさね

すか枕おもほん人はかくもあらしたかさねぬよにちりつもろん
半壁字不可然初字已振露雖不可直政後字可存とはにひと
すむとこは如此可詠

みかさ山いかにたつねむしらゆまのふりにしあとはたえはてにけり

二見浦首 文治二年 内伍上人勸進之

詠首告知歌

春首首

侍徒

よしの山がすめるそらをけき見れば年は一夜のへたてなりけり
道たゆる山のかげは雪消て春のくるにもあは見えけり
なにとなく心をとまる山のはにことし見初る三日月のかけ
春きぬとかすむけしきをしるへにて相につた小鷹のこえ
雪きてわかなつむのとこめてしも霞のいかて春をみすとむ
かれはれし草のとさしのはかなさも霞にかゝる春の山すと
風かほるそちの山地の梅花いろにみするは谷のした水

九三

九四

九五

九六

九七

九八

九九

一〇〇

一〇一

一〇二

一〇三

一〇四

一〇五

一〇六

一〇七

むめの花したゆく水のかけみれば匂ひは袖にまつうつりけり
あきなきにゆきか小舟のけしきまで春をうかふる浪の上哉
をららちのよもの梢はさくらに春風かほるみよしの山

あを柳のかつらき山の花さかりくもにさしきとたちをかかぬる
いまもこれすきてもほるの傍は花見るみらの花の色々
あらしやはさくよりちらす桜花すくるつらさは日教せけり

おしましよさくらばかりの花もなし秋へきための色にもある曉
いしはしる港こそけふもいとほるれちりてもしし花は見まじと
いつこにて風をも世をも恨ましよしの奥も花はらるる也

またきより花を見すてゆく雁やかへりて春のとまりとほしる
花のらるゆくまをたにもへたてつ霞のほかにすくるほるかな
を山田の水のなかれとるへにてせきいるるへになく蛙哉

くれぬなりあすもはるとはたのまぬに猶のこりける鳥のこぞ
夏十首

ちりわたあなうの花やさくからに春とへたつるかきねなりけり
なへて世にまたてを見はや郭公さらはつらさにこぞやたつると
あやめ草かほるのきは夕風にきく心地するほととぎす哉

うらめしやまた水くへてほととぎすそれかあうぬか村雨のそら
五月雨のくものあなたはゆく月の夜のこせとかほる橋
夏ふかきさくらかしたに水せきて心のはと風に見えぬる

猶しほしてやはあけむ夏よのいはこす浪に月はやとりて
大井河をらのこす念のあおはより心にみゆる秋の色々
つきたつせみのもろさほるかにて梢も見えぬならのしたかけ

なつそしる山井の水たつねきておなし木かけにむす小契りは
秋十首

秋十首

- 一〇八
- 一〇九
- 一一〇
- 一一一
- 一一二
- 一一三
- 一一四
- 一一五
- 一一六
- 一一七
- 一一八
- 一二九
- 一三〇

ゆふまくれ秋のけしきになるまに袖より露ほをきけるものを
わすれつるむかしと見つるゆめと又猶おもろかす秋の上風
これもこれうき世の色とあらしなく秋のほとらの花のうは露
秋のきて風のみたらしそらとたにふ人はなきやとの夕霧
見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のたまやの秋の夕暮
あきといへは人の心にやとりきて待たかほぬ月のかけ哉
いつるよりてる月かけの清見かたをらすへ水る浪の上かな
いとほしよ月にたなひくうき雲も秋のけしきほそらに見えけり
なかめしと思し物と浅草生に風ふくやとの秋の夜の月
秋のみを更ゆく月になかめておなしうき世は思しれとも
ありあけの光のみかは秋の夜の月は此世に猶のこりけり
くれてゆくかたみにのこる月にさへあらぬ光をそふる秋哉
ゆふやみになりぬと思へはなかな月の月待まにおしき秋かな
大かたの秋のけしきは暮はてた山のほのありあけの月
新秋
はつかりのくもあめのははるかにてあけかたらかき天のかは霧
山かつの身のためうつ秋ゆへ秋のあはれとてまかす曉
そこはかと心にそめぬしたくさもかるれはよはる虫のこえく
うつろはむまかきの菊ほすきそめてまつ色かほる浅草けら哉
神なひのみむろの山のいかならむしくれもてゆく秋のくれかな
たにいまのらはらをもこのかものと見て心つよくもかへる秋かな
冬十首

- 一三一
- 一三二
- 一三三
- 一三四
- 一三五
- 一三六
- 一三七
- 一三八
- 一三九
- 一四〇
- 一四一
- 一四二
- 一四三
- 一四四
- 一四五
- 一四六
- 一四七
- 一四八
- 一四九
- 一五〇
- 一五一
- 一五二
- 一五三
- 一五四

はれくもるおまじなめのためは時雨にたゆる蓮の里人
物ことにははれのこらぬみ山がなつるこのはもかる、葉葉も
あさゆふのそとは時雨のならしはにいふうかはるあられなるらむ
さひしけのふかきみ山の松はらやみねにもおにも雪はつもりて
あとたえてゆきもいくよかふりぬらむおのくえ朽らしいはのかけ道
おしみつくれぬる年をかねてよいいま禁度としるせなりせば

悪十首

世中よたかきいやしきなそへなくとありをめし思ひなるらむ
おもふとは見ゆるむものとのつからしれかし宵の夢はかりたに
このよくりこからく恋にかつもえて猶うとまれぬ心なりけり
悪て思しほともえそなれぬた、時のまのあふなほかりは
あまのはらそらゆく月の光かほ手にとるからに雲のよそなる
若といへはおつる涙にくらされて悪しつくとわくかたもなし
こひはよし心つからもなけくなりこはたかへしおもかけをさば
あらまなくつらきあらしの声もうしなと夕暮しまじならひけむ
しかはかり契りし中もかはりける此世に人をたのみける哉
ひたら帯のかこともいとまとはれて恋こそみらのほてなかりけれ

述懐五首

見しはみみ者とかはる夢の肉におとあかれぬは心なりけり
とつからあれはある世になからへておしむと人に見えぬへき哉
見るもうし思ふもくるしかすなうてなと古一のひをめけん
ありはてぬ命とさそとしりなからほかなくも世をあけくらす哉
月のいり秋のくろくをこしみてもににはわきてしたふ心ぞ
まほろしよゆめともいはいし世中はかくてきし見るほかなさこそこれ

無常五首

- 一五五 をしなへて世はかりをめの草枕むすふ秋にまゆる白露
- 一五六 世中はたうかけやとすますかすみ見るとありともたのむへきかは
- 一五七 あすはこむまてふみちも人の世のなかきわかれにならぬものは
- 一五八 ひとしれぬ人の心のかねこともかはれははるる此世なりけり
- 一五九
- 一六〇
- 一六一 さやかなる月日のかげにあたりてもあまてる神をたのむばかりそ
- 一六二 なか／＼にさしてもいはいしみかさ山おもふ心は神もしらるらむ
- 一六三 きくことにはたのむ心そすみまざるかもの社のみたらしのこぞ
- 一六四 うきこともなくさむ蓮のしるへとや世を住よしとあまくたりけむ
- 一六五 いかならむみわの山もとしふりてすきゆく秋のくれかたのそら
- 一六六 しのゝめよも草葉もしほるまていかに契りて露のそくらむ
- 一六七 夕
- 一六八 そこはかと見えぬ山地の夕けふりたつにそ人のすみかともしる
- 一六九 夜
- 一七〇 むかし思ひ質のそらにすまけむゆく念もしらぬ月のひかりの
- 一七一 山家
- 一七二 山ふかき竹のあみとに風さえていくよたえぬる夢なる曉
- 一七三 田家
- 一七四 しきのたつ秋の山田のかり枕たかすることそ心ならては
- 一七五 山
- 一七六 あけぬとも猶おもかけにたつた山こひしかるへも夜ほのそとみ哉
- 一七七 河
- 一七八 よそにてもそてこそぬるれみなれ梅猶さしかへるうちのかほとす
- 一七九
- 一八〇
- 一八一
- 一八二
- 一八三
- 一八四
- 一八五
- 一八六
- 一八七
- 一八八
- 一八九
- 一九〇
- 一九一
- 一九二

8 別
わするなよとる秋はかはるともかたみにしほる夜半の月かけ

旅

月よするうらはの浪をふもにてまつ袖ぬらす峯の松風
ふる柳をへたてぬ峯のなかめにもこえこし雲を聞はずへける

楊貴妃

みかきとくたまのすみかも袖ぬれて露と消にしのへそかなしき

李夫人

ほのかなるけふりはたくふほともなしなれし雲井にたちかへれとも

王昭君

うつすともくもりあらしとたのみこしかくみのかけのまつうらき哉

上陽入

しらすりきちりもはらはぬ床の上にひとり齢のつもるへしとは

陵園妻

なれきにしそらのひかりのこひしさに独しほる、病の上露

皇后宮大輔百首

文治三年春詠送文

詠百首和詠

侍従

春十五首

もうひとの袖をつらぬる紫の庭にやはるもたちほそむらん

春きぬと霞は色に見すれとも年をこむるは梅のはつ花

峯の松たにのふるすに雪消てあざ日ともにもいつる鶯

梅花にはひの色はなれれともかすめるまをゆくゑとそめる

いりまさる松のみとりの一しほにはるの目教のふかさぞしる

あざみとりつゆぬきみたる春さめにしたさへひかるたま柳哉

一九三

一九四

一九五

一九六

一九七

一九八

一九九

二〇〇

秋きりをわけしかりかね立かへり霞にきゆるあけほの、そら

しるからむこれぞとれとはいはすと花のみやこの春のけしきは

白雲とまかふざくらにさきはれて心ぞかゝる山のはことに
かすみとも花ともわかすかはらや伏見の里のはるのあけはの
雪とちるびらのたかねの桜花猶ふさかへせしかのうら風

いかにしてしつ心なく秋花のとききはるの色と見ゆらむ

九重のくものうへとはざくら花ちりしく春の右にこそありけれ

ふりにける庭のこけちに春くれてゆくゑもしらぬ花のしら雪

祥弓いる日をいかてひきとめむさてもせをして春のかへると

夏十首

いつしかとけふぬく袖よ花の色うづれはかはる心なりけり

あたらしやしつかきねをかりそめにへたつばかりのやへの卯花

さらもそらなかもやましろ葉をさもわひさする郭公かな

なとりたにしはしなあけそほときすなきつる夜半のそらのうき雲

五月雨のをやまぬそらそもしほやくうらのけふりのはれまなりける

庭たつみかきはもたへぬ五月雨はまきのとくらに寝なくなり

あちまえのしたはにすたく鶯をはよひらのかすのそふかかぞ見る

紅のつゆにあざみさうつしてもあたりまてゝるなましこの花

浪風のこゑにも夏はわすれくさ日教をそつむ佳よしのはま

みそき河からぬあさちのすゑをさへみなひとかたに風さなひかす

秋十五首

秋の色をしらせそむとちみか月の光をみかく秋のした露

わすれ水たえま／＼のかけ見ればむらこにうつるほきか花すり

ゆふさはれすきにし秋の衰さへさらに身にしむ秋の上風

袖はさき秋は心に露やをく風につけてもまつくたくらむ

二〇七

二〇八

二〇九

二一〇

二一一

二一二

二一三

二一四

二一五

二一六

二一七

二一八

二一九

二二〇

二二一

二二二

二二三

二二四

二二五

二二六

二二七

二二八

二二九

たつぬれは花のつゆのみこほれつゝ野風にたくふ松虫の声
さゝなみやしかのうららの朝霧にまほにもみえぬ沖のとも舟
我のみと声にも鹿のたつる哉月は光に見せぬ秋かは

千載
まらおしむひまこそなけれ秋風の雲ふきまかふ夜はの月かけ
如何せむさらうき世はなくさますたのみし月も涙おちけり
となせかは玉ちるせゝの月を見て心そ秋にうつりはてぬる

山のはになこりとゝめぬかけよりも人たのめなる在明の月
秋ふかきゝしのしらすく風ふけは匂ひはそらのものにそありける
さひしきさはききそへてけり秋のえの秋の木葉にまよふ初霜

いろ／＼に紅葉をそむる衣手もあきのくれゆくつまと見ゆらむ
くれてゆく秋も山ちの見えぬまでらりかひくもれ峯のみみちは

冬十首

さためなきしくれの雲のたえま裁さてや紅葉うすくこからむ
冬きては野辺のかりねの草枕くるれば霜やまつむす小笠

たひねする夢ちはたえぬ須磨の関かよふ千鳥の暁のこゑ
ふりしきし木のはの庭にいつなれてあられまちとるををつくらむ
日かけ草くもりなきよのためしとやとよのあかりにかさしめけん

神かきやしをそくまゝに打しめり月かけやとる山あるの袖
ふる雪にさてもとまらぬみかりのを花の衣のまつかへららむ
つもりける雪のふかさもしらさりつ横のとあくる曙のそら

をらかたやはるけき道に雪つもりまつよかさなる宇治のはし姫
年のうちにはかなくかはる事もみなくれぬるけふそおとろかれぬる

恋恋

わか恋よきみにもはてはしのひけり何をほしめと思そめけむ
みをつくしくのふ涙のみこもりに此よをかくて朽やはてなん

二二〇

二二一

二二二

二二三

二二四

二二五

二二六

二二七

二二八

二二九

二三〇

いかならむふしにさそともしらせましまたねもたてぬ夜半の笛たけ

事つてむ人の心もあやうさにふみたにも見ぬあさむつのはし

袖のうへにさもせきかへすなみた哉人の名をさへくたしはてしと

おりたちてかけをも見はやわたり河しつまむそのおなしふかさ

あらはれむそのにしきゝはさもあらはれ君かためてふ名をしたてすは

あしかきのひとめひまなきまぢかさをわけてつたふるまほろしもかな

みたれしとかくてたえなむたまのよななき恨のいつかさむへき

恋わひぬ心のおくのしのふ山露も時雨も色に見せしと

逢不遇恋

あけぬとてわかれしそらにまさりけりつらき恨にかへる恋ぢは

年月はをのかさま／＼つもるともわするへしとは契りやはせし

なかくしもむすはさりける契りゆへ何あけまきのよりあひにけん

かきなかつたゝそのふてのあとなからかはる心のはと見えけり

世ゝもにしふなけきなくさめはわすらるゝ名のたゝぬ斗や

猶そうき此世にぎゝしことのはゝかはるもゝとの契りと思へは

うきを猶したふ心のよはらぬやたゆる契りのたのみなるらん

わすれぬやさはわすれるわか心夢になせとそいひてわかれし

うつるなりよしさてさらはなからへよさのみあたる君か名もおし

たひのそらしらぬかりねに立別あしたの雲のかたみたになし

寄名恋十首

霞しくよしのゝ山のさくら花あかぬ心はかりそめにき

いはてのみ年ふる恋をすゝか川やせの浪を袖にみなきる

いつかこの月日をすきのしるしとてわかまつ人を見わの山もと

きよみかたせきもるなみにことゝはむ我よりすくる思ひありやと

浪こさむ袖とはかねて思ひにき米のまつ山たつね見しより

二五二

二五四

二五五

二五六

二五七

二五八

二五九

二六〇

二六一

二六二

二六三

二六四

二六五

二六六

二六七

二六八

二六九

二七〇

二七一

二七二

二七三

二七四

二七五

しほかまのうらみになれてたつけふりからき思ひはわれ独のみ
たつね見よよしさらしな月ならはななくさめかぬる心しるやと
いかて猶わかににわけてむすひ見んだゝあすか井の影はかりたに
なみたやはもみちはなかつ立田河大きるとすればかはる色かな
ぬのひきの大きよりほかにぬきみたりまなく玉ちる床の上哉

雑恋十首

ほともなきおなしのちをすてはてゝ君にかへつるうき身ともかな

よな／＼は身もろきぬへし芦へよりみちくるしほのまさる思ひに
さもこそはみなとは袖のうへならめ君に心のまつさわくらん

君のみとわきても今はつらからすかゝるもの思世をせうらむる
時のまの袖のなかにもまさるやとかよふ心に身をたくへばや

うしみつときゝたにはてし待えずはたゝあけぬまの命ともかな

斬 恋しやのまさるなけきは夢ならてそれとたにみぬやみのうつゝよ
すまの髪に袖にふきこすしは風のなるとはすれとてにもたまらず

見てすきよ猶あさかほの露のまにしほしものとめむあかぬ光を
あひ見ても猶ゆくゑなき思ひ我命やこひのかきりなるらむ

旅恋五首

こひわひぬ花ちる峯にやとからむかさねし袖やせてもまかふと
夏山やゆくてにむすふし水にもあかてわかれしふるごとをのみ

單枕ちるもみちはのひまもかななれこし方をよそにたにみむ
かりにゆかいほりも雪にうつもれて尋すわふるもすの單くき

わすればや松風寒き浪のうへにけふしのへとも契らぬものを

寄法文恋五首

人天交接兩得相見

ひとの世もそもあひみん時にもや君か心は猶へたつへき

二七六

二七七

二七八

二七九

二八〇

二八一

二八二

二八三

二八四

二八五

二八六

二八七

二八八

二八九

二九〇

二九一

二九二

二九三

二九四

二九五

二九六

我不愛身命

あちきなやかみなきみらまゝしむかは命をすてん恋の山へよ

又如淨明鏡

法にすむ心に身をもみかゝはやさても恋しきかけや見ゆると

如渡律船

きみをきてまつもびさしきわたし舟のりうる人の契りしれとや

又如一眼之龍値浮木乳

たとふなる浪ちのかのうきゝかはあはてもいくよしほれきぬ覺

閑居百首 文治三年冬与越中侍従歌之

詠百首和歌

春廿首

侍従

けふは又あまつやしろの柳はも春のひかけ差さしやそふらん
今よりのけしきに春はこめてけり霞もはてぬあけほのゝそら

うくびすとなきつるとりやはるきぬとめくむわか人も人にしらする
ふりつる色よりほかの匂ひもて雪をば梅のうつむなりけり

いろ見えて春にうつろふ心哉やみはあやなき梅の匂ひに

雪きゆるかた山かけのあおみどりいはねのこけも春は見せけり
ちきりをけたまゝく葛に風ふかはうらみもはてしかへる雁かね

春さあよこのはみたれしむら時雨それもまさるゝ方はありけり
としふれと心の春はよそなからなかなれぬるあけほのゝそら

しはしとていてこし庭もあれにけりよもきのかれはすみれましりに
山さとのまかきの春のほとなきにわらひ許やおりはしるらむ

月かけのあはれをつくす春の夜にのこりおほくもかすむそら哉
はるのきてあひ見んことは命そと思し花をゝしみつるかな

二九七

二九八

二九九

三〇〇

三〇一

三〇二

三〇三

三〇四

三〇五

三〇六

三〇七

三〇八

三〇九

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

おもしくさくさくらさきける此世哉さもこそ月のぞらにすむとも
 さくと見し花の楢にほのかにて霞々にはほゆふくれのそら
 雲のうへのかすみにごむるさくら花又たならぬ色をみぬ哉
 たつねはやしのふのおくの桜花風にしられぬ色やのころと
 ちる花をみよのほとけにいのりてもかきる日教のとまらましかは
 花さかぬわかみやま木のつれくといく年すきぬみよのはる風
 ものことにいろはかはらておしまるゝ春は心のわかれなりけり

夏十五首

春なつをののかきぬくぬきかへてかさねし袖を猶おしむ哉
 しかりとてけふやはなるほとゝきすまつ春暮てうらめしのよや
 なにとなくすきにし春ぞしたはるゝふちつゝしやく山のほそ道
 如何せむひのくま河のほとゝきすたゝ一声のかげもとまらず
 橋に風ふさかほろくもりよますさひになるほとゝきす哉
 ふるさととは庭もまかきもこけむして花なら花の花ぞちりける
 さみやみせらやはかはる年をへてのきのあやめの風のまされに
 山さとのゝきはのこすえくもこえてあまりなとちそ五月雨のそら
 打もねすくればはいそくうかひ舟しつまぬよもやくるしからむ
 いかならむしけみかそこともしゝて鹿まちわふるほとゝ久しき
 もゝしきの大まのみきりのみかかは水まかふ髪もひかりそへけり
 やへむくらしけるまかきの下露にしほれもはてぬなてしこの花
 かけきよき池のはらずに風すきてあはれすゝしきたまくれ哉
 松風のひゝきも色もひとつにてみとりにおつるたにかはの水
 なつつかきのへをまかきにこのまきてきりまの露の色をまつかな

秋廿首

ふく風にのきはのおきはこゑたてつ秋よりほかにとふ人はなし

三四 草のはらささゝかすえもつゆふかしをのかさまく秋たちぬとて
 三五 虫のねにはかなきつゆのむすほれところもわかぬ秋のゆふくれ
 三三六 よをかきね身にしみまさるあらし哉松の楢に秋やすくらん
 三三七 秋ふかき木々のこすえにやとかりてみやこにかよふ山おろしの風
 三三八 ほのくゝとわかすむかたはきりこめて声やの里に秋風をふく
 三一九 秋きぬと手ならしそのしほしたかにもすえのにすゝのこゑならすなり
 三二〇 うつらなくゆふへのそらをなごりにて野となりけりふかくざの里
 夢にたにつまにはあはぬさをしかの思たえぬるあけほのこゑ
 まとむと思もはてぬ夢ちよりうつゝにつゝくはつかりのこゑ
 くまなさはまうちしことそ秋の夜の月よりのちのなくさめも哉
 ひさかたのくもるをほらふこらしにうたてもすめるよほの月哉
 三二一 ゆくゑなきせらに心のかよふ哉月すむ秋のくものかけはし
 三二二 いろかはるあさちかすゑの白露に猶かけやとすありあけの月
 三二三 わかおもふ入すむやとのうすもみちきりのたえまに見てやすきなん
 三二四 うつらひぬ心の花はしらきくのしもをく色をかつうらみても
 三二五 龍田山紅葉がみわけたつぬれはゆふつけとりのこゑのみぞする
 三二六 みよしのも花見し春のけしきはしくるゝ秋の夕暮のそら
 三二七 あぢきなく心に秋はとまりてなかむるへののしもかれぬらん
 三二八 ゆく秋のしくれもはてぬ夕まくれなゝゝわくへさかたみなるらん

冬十五首

三三三 かくしつゝことしもくれぬと思よりまつなけるゝ冬はきけり
 三三四 いまよりはいつれの里にやとからむ木の葉しくれぬ山かけもなし
 三三五 風ふけはやかてはれのくうきくもの又いつかたにうらうらむ
 三三六 やま里はわけける袖のうへをたにはらひもあへする木のは哉
 をの山やゝくすみかまのけふりにそゑたちぬとはそらに見えける

続後

あられふるしつかさ、やよよぎらに一夜はかりの夢をやは見る
さひしきは霜こそ雪にまさりけり茶の檜のあけほの、そら

しもふかきさわへのあしになくつるのこゑもうらむるあけくれのそら
うらやまし時をわすれぬはつ雪よわかまつことそ月日ふれとも

いかにせむゆきさへけさはふりにけりさ、わけしの、秋のかよひち
山ふかきまきはしのく雪をみてしはしはすまん人とはすととも

秋風やはに浪こそはよ、つのねにあらはれてなぐちとり我
ふる袖の山あめの色も年つみて身もしほれぬる心ちこそすれ

身につもる年まほ雪のいろに見てかすすふくれす物はかなしき
はる秋のあかぬなこりをとりそへてさながらおしき年のくれかな

志十首

あさましやむなしきそらにゆふしめのかけてもいか、人はうらみむ
たくふへきむろのやしまをそれとたにしらせぬそらのやへかすみ我

さはかりに心のほとを見せそめたよりもつらさなけきをそする
わすられぬ人をいつことたつねてもなれしかことのあるよなりせは

うかつらき人をも身をもよし、らし、時のまのあふこともかな
いかにせむあふよをまさるなけきにて又それならぬなくすめはなし

今そしるあかぬ別のなみた河身をなけはつる恋のふらとも
しきたへの枕なる、床の上にせきとめかたく人そこひしき

新古今 かなへるさのものや人のなかわらんまつよなからの有明の月
ちきらすよ心に秋はたつた河わたるもみちの中たえむとは

述懐五首

むれてみしおなしなきさのともつるよわか身ひとつのなとをくるらん
こす浪ののりをひろふはまの石のとをとのちも三とせすくしつ

をしなへてをよはぬ枝の花ならはよそにみかさの山もうかし

三六一

三六二

三六三

三六四

三六五

三六六

三六七

三六八

三六九

三七〇

三七一

三七二

三七三

三七四

三七五

三七六

三七七

三七八

三七八

三七八

三八〇

影よきくもるの月をなめつ、さてもへぬへき此世はかりを
これも又おもふにたかふ心かなすてすはうきまななくへきかは

たのむかなかすかの山の峯つ、さかけものとけき松のむらたち
あとたえてそなたとたのむ道もなしみなみの岸のしるへならては

しかばかりかたきみのりのすゑにありて表このよとまつ思ふ我
花の春紅葉の秋とあくかれてこ、ろのはてや世にはとまらん

世中を思ひのきはの思草いくよのやと、あれかはてなむ
ささのる池のみきはに松ふりてみやこのほかの心ちこそすれ

ゆきかはる時につけてはをのつからあはれを見する山のかけかな
たきのをと峯のあらしもひとつにうちあらはなる峯のかき我

さとひたるいぬのこゑにそきこえつる竹よりおくの人のいゑるは
菊かれてとひかふてうの見えぬ我さきちる花やいのちなりけん

さかのぼる波のいくへにしほれけむあまのかはらの秋のはつ風
くろかみはましりしゆきのいろながら心のいろはかりやはせし

くさかれの、はらのこまもうらふれてしらぬさかひのなかくのそら
つてにきくちきりもかなしあひおもふこそ表のましのよなくのこゑ

いか許ふかき心のそこを見ていくたの河に身のしつみけん

奉和無動寺法印早庵臘白首 文治五年春

詠百首和歌

春 此題同羅川院百首今略而不書之

待後

年くれしあはれをそらのいろなからいかに見すらんはるのあけほの
なにゆへにはつねのけふのこ松はら春のまるとま契りそめけん

たちかくすよそのは、るのかすみにて雪にそこもるおくの山さと

四〇一

四〇二

四〇三

四〇四

四〇五

四〇六

四〇七

四〇八

四〇九

四一〇

うくひすのやとしめそむるくれ竹にまたふしなれぬわかねなくなり
 いさげふはあすのはるさめまたすとも野さはのわかかな見てもかへらん
 ふみしたくをとうかししたにしみいりてうつもれかはる春の雪かな
 こぞもこれはるのほひになりけり梅さくやとのあけくれのぞら
 をそくときみとりのいとにしろき哉はるくるかたの岸の青柳
 いはそくし水もはるのこゑだて、うちやいてつるたにのさわらひ
 いか、せむくもるのさくらなれく、てうき身をさそと思はつとも
 春の夜をまとうつあめにふしわひて我のみとりのこゑをまつ哉
 をちかたや花にいはえてゆくこまのこゑもはるなるなきひくらし
 春ふかみこしちにかりのかへる山名こそ霞にかくれざりけれ
 おもひたつみちのしるへか喚子鳥ふかき山へに人さそふなり
 きなれたるこまにまかせむなはしうの水に山ちはひきかへてけり
 はるさめのふるの、みちのつぼ置つみてをゆかん袖はぬるとも
 せきちこえみやこ恋しきやつはしにいと、へたつるかきつはた我
 おもふから猶うとまれぬふちの花さくより春のくるゝならひに
 ちらすなよ井手のしからみせきかへしいはぬ色なる山吹の花
 春しらぬうき身ひとつにとまりけりくれぬる暮を惜なきは

夏

四〇四
 四〇五
 四〇六
 四〇七
 四〇八
 四〇九
 四一〇
 四一一
 四一二
 四一三
 四一四
 四一五
 四一六
 四一七
 四一八
 四一九
 四二〇

如柯せむひとへにかはる袖の上にかさねておしき花のわかれを
 秋糸のあはれしらする卯花よ月にもにたり雪かともみゆ
 としをへて神もみあれのあふひくさかけてかゝらむ身とはいのらす
 あつまやのひさしうらめしほとくきすまつ宵する村雨のこゑ
 はるたちし年もさ月のけふきぬとくもらぬぞらにあやめふく也
 とるなへのはやく月日はすきにけりそよきし風のをもとほとなく
 夏衣たつたの山にともしすといく夜かさねてそてぬらす覺

四二八
 四二九
 四三〇
 四三一
 四三二
 四三三
 四三四
 四三五
 四三六
 四三七
 四三八
 四三九
 四四〇
 四四一
 四四二
 四四三
 四四四
 四四五
 四四六
 四四七
 四四八
 四四九
 四五〇
 四五一

新

秋

玉梓の道ゆき人のことつてもたえてほとふる五月雨のぞら
 ふるさとの花橋になかめして見ぬゆくすゑそはてはかなしき
 打なひく刃そひ柳ふく風にまつみたるゝははたるなりけり
 ひとすむとはかり見ゆるかや火のけふりをたのむぞちのしはかき
 この世にもこのよの物と見えぬ哉はちすの露にやとる月かけ
 ひむろ山まかせし水のさえぬればなつせかるゝかけにそありける
 山かけのいはねのし水たちよれば心の内を人やくむらん
 みそきてとしをなかはとかそふれば秋よりさきにものぞ悲しき

四二八
 四二九
 四三〇
 四三一
 四三二
 四三三
 四三四
 四三五
 四三六
 四三七
 四三八
 四三九
 四四〇
 四四一
 四四二
 四四三
 四四四
 四四五
 四四六
 四四七
 四四八
 四四九
 四五〇
 四五一

おもふとてかひなきよをはいかゝせむ心はのこれなき身なりとも
思ひやる心はきはまなかりけりちとせもあかぬ君かよのため

重奉和早率百首 文治五年三月

百首和歌 同題

春

吉野山かすまぬ方のたに水も打いつる浪に春はたつ也

ねの日するのへのこまつのひきくゝにうら山しくもはるにあふかな
たつぎて秋見し山のおもかけにあはれたちそふ春霞哉
はるやとき谷のうくひす打はふきけふしら雪のふるすいつ也
もろともにてこし人のかたみ我色もかはらぬのへのわかなは
心にもあらぬわかれのなごりかはきえてもおしきはるの雪哉

春の夜は月の桂もにほふらむひかりに梅の色はまかひぬ
うへをさし昔を人に見せかほにはるかになひく青柳のいと
わらひおるおなし山ちのゆきすりにはるのみやすむいはのものと哉

けふこすは庭にや春ののこらまし積うつろふ花の下風
はるも又かれし人ぬにまちわひぬ草は、しける雨につけても
ひさかへつあしのはめくむなにはかたうらわのせらもこまのけしきも

これに見つこしちの秋もいかならむよしのゝはるをとかへるかりかね
くもり夜の月のかけのみほのかにてゆく方しらぬよふふことり哉

おもふこそかへすゝもさびしけれあら田のおもけふの春雨
すみれつむ花ぞの衣つゆをゝもみかへりてうつる月くさの色

ふりにけりたれかみきりのかきつはたなれのみ春の色ふかくして
ゆく春をうらむらさきのふちの花かへるたよりにそめやすつらむ

すきてゆくまそてに、ほふ山吹に心をさへむわくるみち哉

四九九 五〇〇 五〇一 五〇二 五〇三 五〇四 五〇五 五〇六 五〇七 五〇八 五〇九 五〇〇 五一〇 五一一 五一二

夏

はるのけふさきゆく山にしほりして心つからのかたみとも見む
ぬきかふるせみのは衣せてぬれて春のなごりましのひねそなく
いたひさしひさしくとはぬ山さとも浪まに見ゆる卯花のころ
あまの河おふともきかぬ物ゆへに年にあふ日となどちきりけん
郭公世になき物と思ふともななめやせまし夏の夕暮

かせふけは夢の枕にあはすなりしけきあやめの、きのにはひを
たねまきしむうのはやわせいけりおりの雨もしみみ、に
ともしするしけみかそこのすり衣袖のしのぶも露やまくらん
とはてこしよもきのかとのいかならむそらさへとつるさみたれのころ

終夜花桶をぶく風のわかればなるあか月の袖
夏虫のひかりそゝよくなにはかたあしのはわけにすくるうら風
かやり火のけふりのあどや草枕たちなんのへのかたみなるへき
あさゆふにわかおもふかたのしるへせよくるれはむかふはちす葉の露

いとひつる夜手かるし氷室山ゆふへの、ちの木のたの下かせ
よるひると人はこのころたつねきて夏にしられぬやとのまし水
みそきすとしはし人なすあざのはもおもへは潤しかりそめのよき

秋

けふといへはこす表に秋の風たちてしたのなけきも色かはる也
秋風やいかゝ身にむ天河さみまつよひのうたゝねのどこ
ちらはちれつゆわけゆかむはきはらやぬれての、ちの花のかたみに
しのゝめにわかれしそての露の色をよしなくみするをみなへし哉

人もとへあれなんのちの虫のねもうへをくすゝ秋したえすは
朝またさちくさの花もさてをさつ玉ぬくのへのかるかやの露
きりのまにひとえたおらむ藤梅あかぬ匂ひや袖にうつると

五二一 五二二 五二三 五二四 五二五 五二六 五二七 五二八 五二九 五三〇 五三一 五三二 五三三 五三四 五三五

五二一 五二二 五二三 五二四 五二五 五二六 五二七 五二八 五二九 五三〇 五三一 五三二 五三三 五三四 五三五

おきの葉にふきたつ風のをどなひよそ秋ぞかし思ひつること
きりふかきと山のみねをなかくても待ほどときぬはつかりのこゑ
わひ人のわかやとからの松風になげきくはゝるさましかのこゑ
秋夜山のしづくにたちぬれて花のうはきは露もかはかず
したむせふうちのかはなみきりこめてをちかた人のなかめわふらん
あざかほよなにかほとなくうつろはむ人の心の花もかはかり
かぞへこし秋のなかはをこよひぞとさやかに見するもち月のこま
月きよみよものおほそらくも消て千里の秋をうつむしう雷
とけてぬぬふしみの里はなのみして誰ふかき夜に夜うつらん
松虫の声たにつらきよなくをはては梢に風よはるなり
ひとすちにたのみしもせず春雨にうへてしきくの花をみむとは
龍田山やまのかよひちをしなへて紅葉をわくる秋のくれ哉
をくれしとちきらぬ秋のわかれゆへことばりなくもしほる袖哉

秋のみか風も心もと、まらずみなしもかれの冬の山さど
かへり見るこすゑにくものかゝる哉いてつるさとやいましくららん
をきぞめておしみし菊の色を又かへすもつらき冬の霜哉
あられふるしかの山ちに風こえて峯にふきまぐらうらさ、浪
秋ながら猶なかくつる塵のおものかれはも見えすつもる雪哉
こゑはせてなみよるあしのほすゑ哉しほひの方に風や吹覽
ななき夜を思ひあかしうら風になくねをすふる友千鳥哉
大井河浪をみせきにふきとめて水は風のむすふせけり
よそへても見せはや人にをしかもさわく入江のそこのおもひを
夜をへては見るもはかなきあしう木にこしのみそらの風をまつ覽
かまどめしさを木のこゑにさよふけて身にしみはつるあかほしめら

五四三
五四四
五四五
五四六
五四七
五四八
五四九
五五〇
五五一
五五二
五五三
五五四
五五五
五五六
五五七
五五八
五五九
五六〇
五六一
五六二
五六三
五六四
五六五
五六六

とまるとよかりはのをのゝすり夜ゆきのみたれにそらはきるとも
をの山や見るたにざひしあざゆふにたれすみかまのけふりたつ覽
うつみ火のひかりもはひにつきはてゝさひしくひく鐘のまど哉
兼
なからふるいのち許のかことにてあまたすきぬるとしのくれかな
恋

のちの世をかけてやこびむゆふたすきそれともわかぬ風のまきれに
思ふとはきみにへたてゝさよ夜なれぬなげきに年ぞかさなる
あひ見ての、ちの心をまつしれはつれなしとたにえこそうらみね
なにとこの見るともわかぬまほろしよよのなげきのちへまさる覽
如何せむ夢よりほかに見しゆめの恋にこひますけさの涙を
をのつから人も時のま思いてはそれをこの世の思いてにせん
たひねするあらしはまへの浪のまどにいとゝたらそふ人の佛
いか許ふかきけふりのぞこならむ月日とゝもにつもる思ひの
よひ／＼はわすれてぬらん夢にたになつと見えよかよふたましひ
きみよりも世よりもつらきちさきりこそ身をかへつとも怨のころわ

五五七
五五八
五五九
五六〇
五六一
五六二
五六三
五六四
五六五
五六六
五六七
五六八
五六九
五七〇
五七一
五七二
五七三
五七四
五七五
五七六
五七七
五七八
五七九
五八〇
五八一
五八二
五八三
五八四
五八五
五八六
五八七
五八八
五八九

雑

夜をこめてあざたつかりのひま／＼にたえ／＼みゆるせたのなかはし
 まろえたる日よりをみちのたのみにてはるかに出る浪の上哉
 露しけきさやのなかなか／＼にわすれてすくるみやことも我
 くれてゆく春のかすみを猶こめてへたつるをちにならやわかれん
 いへるしてまたかはかりもしらざりきみ山の里のこからしのこゑ
 おきふしにねずなかけれる霜きゆるかり田のいほのしきのはねかき
 心うしこひしかなしとしのふとてふた、ひ見ゆるむかしなきよ、
 うた、ねに草ひきむすふこともなくはかなの春の夢の枕や
 いづれもふてのすさひはとまりて又なき入のあと、いはれむ
 おしまれぬうさにたへたる身ならずはあはれすきにし昔語を
 あまつそら月日のかげもしつかにてちよは雲井にきみそかそへむ

花月百首 建元元年秋 左大将家

詠百首和歌

権少将

花五十首

緑
 せくらはなさきにし日よりよしの山ぞらもひとつにかほるしら雲
 あしひきの山のはことにさく花のにはひにかすむ春のあけほの
 花さかりと山のはるのからにしき霞のたつもおしきこう哉
 かすみたつ峯の桜の朝ほらけ紅く、るあまのかはなみ
 さくら花ちらぬこすゑに風ふれててる日もかほるしかの山こえ
 花のちやへたつくもにぞらとちてはるにうつめるみよしの、そこ
 さもあらはあれ花よりほかのなめかかは霞にくらすみよしの、はる
 あくかれし雪と月との色とめてこすゑにかほる春の山かけ
 よしの山霞ふきこすゑに風のちらぬさくらの色さそふらん
 ふりきぬる雨もしづくもにほひけり花よりはななうつる山みち

- | | | |
|-----|---------------------------------|-----|
| 五九〇 | ななき日にあそふいとゆふしつかにてそらにそみゆる花のさかりは | 六一一 |
| 五九一 | も、しきやたましく庭の桜花でらす朝日もひかりそひけり | 六一二 |
| 五九二 | かざしてもてくらすはるひの、とけきにちよもへぬへき花のかけ哉 | 六一三 |
| 五九三 | 宮人のそてにまかへるさくら花にはひもどめよはるのかたみに | 六一四 |
| 五九四 | たおりもてゆきかふ人のけしきまで花の匂ひはみやこなりけり | 六一五 |
| 五九五 | こきまする柳のいともむすほ、れみだれてにほふはなさくらかな | 六一六 |
| 五九六 | 雲の内雪のしたなる春のいろをたれわかやとのうへと見るらん | 六一七 |
| 五九七 | あけはてす夜のまの花にこと、へは山のはしらく雲そたなひく | 六一八 |
| 五九八 | 旗のとはのきは花のかけなれはとも枕もはるのあけほの | 六一九 |
| 五九九 | いか許のちもわすれぬつまならん桜になる、やとのゆふくれ | 六二〇 |
| 六〇〇 | めかれせすいと、さくらそおしまる、打もまきれぬ春の山里 | 六二一 |
| | やへむくらとちけるやとのかひもなしふるさと、はぬ花にしあらぬは | 六二二 |
| | 竹のかき松のはしらはこけむせと花のあるしそ春さそひける | 六二三 |
| | はなのふちさくらのそことたつぬれはいはもる水のこゑそかはらぬ | 六二四 |
| | 枝かはず松のみありし楢にてくもと浪とにたとるはるかな | 六二五 |
| | そらは雪庭をば月のひかりとていつこに花のありかたつねん | 六二六 |
| 六〇一 | 花のかはかほるはかりをゆくゑとて風よりつらきやみのそら | 六二七 |
| 六〇二 | 思いるゆくゑは花のうへにしてこけにやとかる春のうた、ね | 六二八 |
| 六〇三 | すかかてにおらましものを桜花かへるよのまに風もこそふけ | 六二九 |
| 六〇四 | ちりまかふ木のもとなからまどうめはさくらにむすふ春のよのゆめ | 六三〇 |
| 六〇五 | またなれぬ花のにはひにたひねしてこたちゆかしきはるのよのやみ | 六三一 |
| 六〇六 | 玉ほこのたよりにみつるさくら花又はいつれの春かあふへき | 六三二 |
| 六〇七 | やまさくらいかなる花の契りにてかはかり人の思そめけむ | 六三三 |
| 六〇八 | 時こそあわれさらてはかゝる匂ひかはさくらもいかにほるをまちけむ | 六三四 |
| 六〇九 | さくら花たおりもやらぬひと枝にこすゑにのこる心をそしる | 六三五 |
| 六一〇 | | |

山桜心の色ぞたれ見てむいく世の花のそこにやとらは
のちもうし昔もつらし桜花うつろふそらのはるの山かせ

こす衣よりほかなる花のおもかけにありしつらさのにたる風哉
なにとなくうらみなれたる夕かなやよひのそらの花のちるこ

くれぬとも花ちる峯のはるのそら猶やとからむ一夜はかりも
春風の浪さすそらになりけり花のみきはの峯のはまづつ

やまかくれ風のしるへに見る花をやてさそふはたに河の水
山さくらまでともいはしちりぬとて思ひますへき花しなけれは

いかにして風のつらさをわすれなんざくらにあらぬ枝たつねて
桜花思ふものからうとまれぬなくさめはてぬ春の契りに

わひつゝは花をうらむる春もかな風のゆくゑに心まよはて
花をおもふ心にやとるまくすはら秋にもかへす風のをど哉

ちりぬとてなとてさくらをうらみけんちらすは見ましけふの庭かは
あとたえしみきはの庭に春くれてこけもや花の下にくちぬる

吹風もちるもおしむも年小れとことほりしらぬ花のうへ哉

月五十首

秋はきぬ月はこのまにもりそめてをさどころなき袖の露哉
さえのほる月のひかりにことそひて秋のいろなるはしあひのそら

これぞこのまなれし秋のゆふへよりまつくもはれていつる月かけ
かぞふれは秋きてのちの月のいろをおほめかしくもしほる袖哉

秋といへばそらすむ月を廻り置て光まらちとる秋のした露
あきをへて心にうかふ月かけをさなからむすふやとのまし水

松むしのこゑのまに／＼とめくれは草葉の露に月そやとれる
あかさりし山井のし水手にくわはしつくも月のかけそやとれる

深草のさとのまかきはあれはてゝ野となる露に月そやとれる

新古

六二六 さむしうやまつ夜の秋の風かけて月をかたしく宇治の橋姫
六二七 なにとなくすきこし秋のかすことのにちみる月のあはれとそなる
六三八 そのふしと思もわかぬなみた哉月やはつらき秋もうからす
六三九 あつまやのまやのあまりの露かけて月の光もそてぬらしけり
六四〇 蓬生のみかきのむしのこゑわけて月は秋とも誰かどふへき
六四一 つきゆへにさすはしはしことゝはむ衆のあみとよわれまたすとも
六四二 庭のおもにうへをく秋の色よりも月にそやとの心見上げる
六四三 わけかたきむくらのやとのつゆのうへは月のあはれもしくものそなき
六四四 関の戸をどりのそらねにはかれともありあけの月は猶ささしける
六四五 思やるみねのいはやのこけのうへに誰かこよひの月を見る哉
六四六 たつねきてさくたにさひしおく山の月にさえたる松風のこと
六四七 つきかけは秋よりおくのしもをきてこふかく見ゆる山るときは木
六四八 山ふかみいはさりとおすたに河をひかりにせける秋のよの月
六四九 秋の夜は月ともわかぬなめゆへそてにこほりのかけそみらぬる
六五〇 見るゆめはおきのは風にとたえして思もあへぬ関の月かけ
なかわれは松よりしににけりかけはるかなるあけかたの月

六五一 のゝめは月もかはらぬわかれにくもらは暮のたのみなき哉
六五二 月ゆへにあまりもつくす心哉おもへはつらし秋のよのそら
六五三 あけは又秋のなかはもすきぬへしかたふく月のおしきのみかは
六五四 いくさとかつゆけきのへにやとかりし光ともなふもち月のこま
六五五 秋の夜のありあけの月の月かけはこの世ならも猶やしのはむ
六五六 いく秋とゆくゑもしらぬ神世までもに見する月のそら哉
六五七 月を思心にそへてしのはすはすれもすへき昔なりけり
六五八 とこのうへのひかりに月のむすびさそやかとさえゆく秋のたまくら
六五九 月さよみはねうちかはしとふ雁のこゑあはれるなる秋風のそら

あくるそら入山のはをうらみつゝいくたひ月にも思ふらむ
袖のうへ枕のしたにやとりきていくとせなれぬ秋の夜の月

さらしなは昔の月のひかりかはた、秋風子をはずすの山

よものそらひとつひかりにみかゝれてならふものなき秋のよの月

夜うつひつきに月のかけふけてみちゆき人のまともきこえす

影さえててらすこしらの山人は月にや秋をわすれはつらん

あくかゝ心はさわもなきものを山のはちかき月のかけかな

わすれしよ月もあはれと思ひてよわか身の、ちのゆく末の秋

しかりとて月の心もまたしらすおもへはうとき秋のね覚を

峯のあらしうらの浪か雪さえてみな白妙の秋のよの月

月きよみねられぬ夜しもゝろこしの雲の夢まで見る心ちする

今よりのこすゑの秋はふかくとも月いつる峯は風のまに／＼

つゆしくれしたはのころぬ山なれば月も夜をへてもりまさりけり

山のはのおもはむこともはつかしく月よりほかの秋はなかもし

あちきなく物思人の袖のうへに展明の月の夜をかさねては

長月の月のありわけの時雨ゆへあすのみちの色もうらめし

十題百首 建久二年末

秋百首和哥

天都十首

左大将家

権少将

久方のくもるはるかにいつる日のけしきをしるさ春はきにけり

いく秋のそらをはいと夜につくしても思ふにあまる月の影かな

すへらきのあまねきみよをそらに見て屋のやどりのかけもここかす

あまの河年の渡の秋かけてさやかになりぬなつのよのやみ

はかなしと見るほともなしいなつまのひかりにさむらうたゝねの夢

六八五

六八六

六八七

六八八

六八九

六九〇

六九一

六九二

六九三

六九四

六九五

六九六

六九七

六九八

六九九

七〇〇

こたへしないつもかはらぬ風のまどになれし昔のゆくゑとふとも

見すしらぬうつもれぬ名のおとやこれたなびきわたる夕暮のくも

けふくれぬあすさへふらむ雨にこそおもはむ人の心をも見ぬ

この日こそさえつる風にくもこりてあられこぼるゝ冬のゆふ暮

かきくらすのきはのそらにかす見えてなかもあへおつる白雪

地都十

あともなしこけむすたにのおくのみちいくせへぬ覽みよしの山

わたつうみによせてはかへるしきなみのはしめもはてしる人ぞなき

うつなみのまなく時なきたまかしはたま／＼みればあかね色かも

わきかへるいはせの浪に秋すきてもみらになりぬ宇治の河かせ

をしのめるあしのかれまの雪氷冬こそ池のさかりなりけれ

わかなつむまろのさはへのあざ緑かすみのほかの春の色哉

秋はたゞいり江はかりのゆふへかは月まつそらのまのゝうら浪

月のせすせきやのかけのほどなきにひとよはあけぬすまのたひふし

しるへなきまをたえのはしにゆきまよひ又いまさらの物やおもはむ

かたるともか辨人やしらさうん雪水のゝへのゆふくれのいろ

居処十

もゝしきやもるしらたまのあけかたにまた霜くらさかねのこゑ哉

くまもなきまのしたく火の影をひて月になれたる秋の宮人

秋津しまおさむるかとのゝときにつたふる北のふら浪のかけ

やとこに心ぞ見ゆるまどるする花の宮このやよひきささき

むらすゝさうへけむあともふりにけりくもるまぢかくまもるすみかに

見なれぬるよとせをいかにしのふらんかきるあかたのたちわかると

たひ枕いくたひゆめのさめぬらん思あかしのむまや／＼と

しはのとよ今はかきりとしめすとも儺けかるへき山のかげ哉

七〇六

七〇七

七〇八

七〇九

七一〇

七一

七二

七三

七四

七五

七六

七七

七八

七九

七〇

七一

七二

七三

七四

七五

七六

七七

七八

露しもおくての山田かりねして袖ほしわふるいはのさ蓬
いてこしみちのさくはらしけりあひて誰なかわらん舊里の月

草十

年の内はけふのみ時にあふひくさかさすみあれをかけてまつらし

神世よりちぎりありてや山あゑもする衣の色とならむ

さやかなる雲井にかさす日かけ草とよのあかりの光ませとや

みちもせしけるよもきふ打なびき人かきもせぬ秋風すく

霜むすふおはなかもとの思望きえなむ後や色にいづへき

あれにけりのきのしたくさ葉をけけみ昔しのふの木の白露

我もおもふうらのはまゆふいくへかはかさねて人をかつたのめども

さくらあざのをふのしたつゆ下にのみわけてくらぬるよなくの袖

道しはやましかやふのをのれのみ打ふく風にみたれてそふる

なかれてもおもふせによるわかせりのねにあらはれてこひんどや見し

木十

草も木もひとつにおつるしものうちにはかへぬ松の色そのこれる

いその神ふるのかみすきふりぬともときはかきはのかはかはらうし

まきもくやひはらのしけみかきわけて昔のあとをたつねてぞ見る

けふ見ればゆみさるほどになりけりうへし阿へのつきのかた枝

たむ祝しるのしたはをおりかけて袖もいほりもひとつ夕露

月もいざまきのはふかき山のかけ雨そつたふるしつくをも見し

かみみ山みかきそへたるたまつはき影もくらね春のそら哉

たまくれ風ふきさすさきりの葉にぞよいまさらの秋にはあらねど

しくれゆくはしのたちえに風こえて心色つく秋の山さと

梢より冬の山かせはらふらしもどつ葉のころならのかしは

鳥十

七二九

七三〇

七三一

七三二

七三三

七三四

七三五

七三六

七三七

七三八

七三九

七四〇

七四一

七四二

七四三

七四四

七四五

七四六

七四七

七四八

七四九

七五〇

しのふ山ささちのおくにかかわしのそのは許や人にしらるゝ

あつさるす寒のはらのにひきすへてとかへるたかをけふそあはする

風たちてさはへにかけるはやふさのはやくも秋のけしきなる哉

かれ野やけけふりのしたにたつきすむせ小思ひや猶まさる覽

ゆふたちのくもまの日かければれそめて山のこなたをわたるしらすき

なるこひく田のもの風になひきつなみよる暮のむら雀哉

深草のさとのゆふ風かよひきてふしみのをのうつらなく也

さらぬたにしもかれはつる草のはをまつうちはらふ庭たき哉

人とぬ冬の山ちのさひしさよかきねのそわにしとつりて

つはくらめあはれに見けるためし哉かはる契りはならひなる世に

歌十

いつしかと春のけしきにひきかへてくも井の庭にいづるあおむま

霜ふかくおくるわかれの小車にあやなくつらさうしのをど哉

おちつものこのはもいくへつもらん臥猶のかるもかきもはらはて

つゆをまつうのけのいかにしおる覽月の桂のかけをたのみて

山さとは人のかよへるあどもなしやともるいぬのこゑはかりして

花さかりむなしき山になくさるの心しらるゝはるの月かけ

思ふにはをくれんものかあらくまのすむて小山のしはしなりとも

つかふるさつねのかれる色よりもふかきまどひにそむる心よ

ほともなぐるゝ日かけにねをそなくひつしのあゆみきくにつけても

たか山の峯ふみならずとらのこのほらむみらの末そはるけき

虫十

なはしろにかつちる花の色なからすたくかはつこのゑそなかるゝ

終夜まかふたるのひかりさへわかればおしきののめそのう

けさ見ればのわきののちの雨はれてたまそのこれるさくかにのいど

七五一

七五二

七五三

七五四

七五五

七五六

七五七

七五八

七五九

七六〇

七六一

七六二

七六三

七六四

七六五

七六六

七六七

七六八

七六九

七七〇

七七一

七七二

七七三

人ならば怒もせましその花かるればかるてうの心よ

七七四

み山ふく風のひよきになりけりこす糸にならふひくらしのこゑ

七七五

わきかぬるゆめの契りになる哉夕のやりにまかふかけつふ

七七六

草ふかきしつゆのふせやのかはしらにいとふけふりをたてそふる哉

七七七

うきて世きふるやのよきにすむはちのさすかになれぬいとふものから

七七八

春さめのふりにしよとをきてみればまぐらのちりにすかるみの虫

七七九

をのつからうちをくふみも月日へてあくれはしみのすみかどなる

七八〇

神祇十

てらすらんかみちの山のあき日かけあまつくもるをのどかなれとは

七八一

かしまのやひはらすきはらときはなる君かさかえは神のまにく

七八二

春日山峯の松原吹風の雲るにたかきよつ世のこゑ

七八三

さか木さすまはのへひわこ松かはす千年のすゑそひさしき

七八四

かも山やいくらの人をみつかさのひさしき世よりあはれかく覽

七八五

たのもしなあか月ちさる月かけのかねてすむらんみよしのたけ

七八六

おもかけに思もさひしうつもれねほかたに冬のゆきのしら山

七八七

雲かゝるならの山かけいかならむみそれはけしきなきよのやみ

七八八

わかうらの浪に心はよすときく我をほしるやすみよしの松

七八九

やはらくるひかりさやかにてらし見よたのむ日よしののみやしう

七九〇

教教十

歎喜地

うれしさのなみたもさらにとまらすなかさきうき世のせきをいつとて

七九一

無垢地

いさきよくみかく心しくもらねは五しくよものさかひをそ見る

七九二

明地

あきらけきあさひのかけにあたし山雪も氷もききえそくくる

七九三

焰患地

冬かれのをどのふるえもえつきてふきかふ風に花をちりしく

七九四

難勝地

あまつ風さはりしくもはふきとちつをどめすかた花にほひて

七九五

現前地

すみまさる池の心にはあらはれてこかねの岸に浪そよせける

七九六

遠行地

さはりなくとを地をわたすはしなればおちやふるてふたくひたに見す

七九七

不動地

をのかし、まもるすかたの身にそひてうこかね道のかたわとそなる

七九八

善慧地

はかりなき花のもろ人なひきこてまさるかさりのかいそありける

七九九

法雲地

おほすらののりのくもちにすむ月のかきりもしらぬひかりをそ見る

八〇〇

詠百首和歌

春

元日宴

春くればほしのくらるに影見えてくもるのはしにいつるたをやめ

八〇一

餘寒

かすみあへす猶ふる雪にそうとうてはる物ふかき埋火のもと

八〇二

春水

氷るしみつのしら浪たちかへり春風しるき池のおも哉

八〇三

若草

をそくとくまのかさまくさく花もひとつふたのはるの若草

踏射

八〇四

影ひたす水さへ色そみとりなるよもの楢のおなしわかにはに

夏草

八一六

もくしきやいてひく庭のあつさる音にかへるはるにあふ哉

野遊

八〇五

なつ山のくさはのたけせしられぬる春見こ松入しひかすは

賀茂祭

八一七

みな人のはるの心のかよひきてなれぬる野辺の花のかけ哉

雑

八〇六

雲のうへをいつるつかひのもうかつらむかふ日かけにかさすけふ哉

鵜河

八一八

たつきしのなるのはらもかすみつこを思ふ道や春まどくらむ

雲雀

八〇七

をちごちになかめやかはすうかひ舟やみを光のかかり火のかけ

夏夜

八一九

木とをきわかほのしはふ打なひきひはりなくの春の夕暮

遊絲

八〇八

夏のよはなるしみつのき枕むすふほどなせうたねの夢

夏衣

八二〇

くりかへしはるのいとゆふいくよへておなし緑のそらに見ゆるん

春曙

八〇九

たつねいるならの葉かけのかさなりてさてしもかうき夏衣哉

扇

八二一

霞かは花くくひすにとちられて春にこもれるやとのあけほの

運目

八一〇

風かよふあふきに秋のさきはれてまつてなれぬるとこの月かけ

夕顔

八二二

なかわわひねひかりのとかにかすむ日に花咲山はにしをわかねと

志賀山越

八一

くれそめ了くさの葉なひく風のまにかきねすしきゆふかほの花

晚立

八二三

袖の雪さらふく風もひとつにて花にほへるしかの山こえ

三月三日

八一

風わたるのきのしたくさ打しおれすしくにはふ夕立のさら

蟬

八二四

からひとのあををつたふるさかつきの浪にしたかふけふもきにはけり

蛙

八一三

あらしふくこすゑはかになくせみの秋をちかしとそらにつくなる

秋

八二五

ほのかなるかれのすそゑのあらを田にかはつも春のくれうらむせ

残春

八一四

秋きても猶ゆふ風をまつかねに夏をわすれしかけそたちうき

残暑

八二六

このもとは日かす許をにほひにて花ものこらねはるのふるさと

夏

八一五

あきこといたえねほしあひのさよふけて光ならふる庭のともし火

乞巧奠

八二七

新樹

稲妻

影やとすほどなき袖のつゆのうへになれてもうときよひのいなつま

鴉

八二八

冬

月すむぎとはまことにあれにけりうつらの床をばらぶ秋風

野分

八二九

かつおしむなかもうつる庭の色よ何ぞ梢の冬にのこさむ

八四一

萩の葉にかはりし風の秋のこゑやかてのわきのつゆくたく也

秋雨

八三〇

しらぎくのうらぬはのこる色がほに春は風をもうらみける哉

八四二

ゆくゑなき秋のおもひせかれぬる村雨なひく雲の遠かた

秋夕

八三一

夢かさは野辺のちくさのおもかけはほのくなく薄許や

八四三

秋またなかつてもいてなまし此さとのみの夕とおもはは

秋田

八三二

狩衣をとうのみちもたらかへりうちくるみゆき野風寒けし

八四四

いく世ともやとはこたへすかと田ぶくいなのは風の秋のまどつれ

鴨

八三三

この山のみねのむらくもふきまよひ横のはつたひみされふりさぬ

八四五

から衣すそのいほのたまぐらそてよりしきのたつ心地する

広沢池眺望

八三四

ひととせまなかつくせる朝といてにうす雪こほるさびしさのはて

八四六

すみきけるあとはひかりにのこれとも月こそふりねひうさはの池

蕪

八三五

あらはれて又冬こもる雪の中にさもとしふかき松の色哉

八四七

あしやのつたはぶのきのむら時雨をとこそたてね色はかくれす

柀

八三六

しるしは冬こそ人にしられれことふあられのこそこからし

八四八

新古今
時わかぬ浪さへ色に泉河はそそのもりにあらしふくらし

九月九日

八三七

ひさかくるねやのふすまのへたてにもひつきはかはるかねのまごかな

八四九

いはひをきて猶なか月とちきる哉けふつむ菊のすゑのしら露

秋霜

八三八

河竹のなひく寒風も年くれてみ世のほとけのみなきく哉

八五〇

とけてぬぬ夢さもしもにむすほれまつしる秋のかたしきの袖

暮秋

八三九

新古今
なひかしなわまのもしほ木たきそめてけふりはそらにくゆりわふとも

八五一

23
ありあけの名許秋の月影によはりはてたる虫のこゑ哉

八四〇

忍恋

氷るるみるめなきさのたくひかはうへせくそてのしたのさゝなみ
願恋 八五二

もうこしの見すしうぬ世の人許名にのみきこてやみねとや思
見恋 八五三

統言 うしつらしめさかのぬまの草のなよかりにもふかきえにはむすはて
見恋 八五四

新古今 おもかけはをしへしやとにさきたちてこたへぬ風のまつにふくこゑ
尋恋 八五五

新古今 祈恋 八五六

年もへぬいのるちきりはつせ山おのへのかねの上その夕暮
契恋 八五七

あちなしたれもはかなき命もてたのめはけ小のくれをたのめよ
待恋 八五八

風つらきもとあらのこはき袖に見て更行夜はにをもちらつゆ
遇恋 八五九

たふましきあすよりのちの心ち哉なれてかなしき思ひそひなは
別恋 八六〇

かはれたゝわかるゝみちのゝへの露いのちにむかふものもおもはし
頸恋 八六一

よしさらは今はしのはてこひしなん思ふにまけし名にたにもたて
稀恋 八六二

年ぞふる見るよなくもかさならて我もなきなかゆめかどぞ思
絶恋 八六三

心さへ又よそ人になりはてはなにかなこりの夢の通路
怨恋 八六四

あらさらむのちの世までをうらみてもその面影をえこそうとまね

舊恋

いかなりし世々のむくひのつらさにて此年月によはらざるらん
晚恋 八六五

おもかけもわかれにかはる鐘のをとにならひかなしきしのゝめのそら
朝恋 八六六

雲かゝりかさなる山をこえもせずへたてまさるはわくる日のかげ
暮恋 八六七

おほかたの露はひるまそわかれけるわか袖ひとつのころしづくに
夕恋 八六八

こひわひしわれとなかめし夕暮もなるれば人のかたみかほなる
夜恋 八六九

たのめぬをまぢつるよるもすきはてつらさとちむるかたしきのとこ
老恋 八七〇

暁にあらぬ別も今はとてわか世ふくれはそかおもひ哉
幼恋 八七一

葉をわかみまたふしなれぬくれ竹のこはしほるへき露のうへかは
速恋 八七二

かなしきはさかひことなるなかとしてきたまよてやよ身にうかれん
近恋 八七三

なみたせくそてのよそめはならへともわすれすやともふくえなき
旅恋 八七四

ふるさとをいしてしまさる涙我あらしの枕ゆめにわかれて
宵月恋 八七五

やすらひにいてにしまゝの月のかけわか涙のみそてにまでとも
寄雲恋 八七六

時のまにきてたなびく白雲のしはしも人にあひ見てし哉

八七七

寄風恋

しらすりし夜ふかき風のきともはす手枕つとき秋のこなたは

八七八

寄雨恋

さはらすはこよひそきみをたのむへき袖には雨の時わかねとも

八七九

寄煙恋

限なきしたのおもひのゆくえとてもえんけふりのはてやみゆへき

八八〇

寄山恋

あしひきの山ちの秋になるそてはうつろふ人の嵐なりけり

八八一

寄河恋

いつかさは又は逢せをまつらかたこの河かみにいゑはすむとも

八八二

寄港恋

とをさかる人の心はうなはらのおきゆく舟のあとのしらす浪

八八三

寄関恋

身にたへぬおもひをすまのせきすへて人に心をなととむらん

八八四

寄橋恋

ひと心をたえのはしにたちかへりこの葉かりしく秋のかよひち

八八五

寄草恋

いはざりきわか身ふるやの思草思なかへてたねをまけとは

八八六

寄木恋

こひしなほこけむすつかにかへふりてもとの契りのくちやはたなん

八八七

寄鳥恋

かものゐるいり江の浪を心にてむねと袖とにさはくこひ哉

八八八

寄獣恋

うらやますふするの床はやすくともななくもかたみねぬも契りを

八八九

わすれしちきりつらむる故郷の心もしらぬ松虫の声 八九〇

寄蟬恋

ふえ竹のたゝひとふしを契りにて世々のうらみをのこせとや思

八九一

寄琴恋

昔きこきみかてなれのことならばゆめにしられてねをもたてまし

八九二

寄松恋

ぬしやたれ見ぬよのことをうつしをく筆のすさひにうかふ楳

八九三

寄衣恋

こひそわしおもひのつまの色そこれ身にしむはるの花の夜手

八九四

寄席恋

わすれすはなれし袖もやゝほるらむね夜のとこのしものさむしう

八九五

寄遊女恋

心かよふゆきこの舟のなかめにもさしてかはかり物はおもはし 八九六

寄魔儒恋

ひと夜かすのかみの里の草枕むすひすてける人の契りを 八九七

寄海人恋

袖そいまはをしまのあまもいざりせんほさねたくひに思ける哉 八九八

寄樵夫恋

山ふかきなげきころをのをのれのみくるしくまとぶこひのみち哉 八九九

寄商人恋

たつの市や日まつしつのでれならばあすしらぬ身にかへてあはまし 九〇〇

正治二年八月八日追録題 同廿五日歌進之

秋日侍 太上皇仙洞同詠百首應 製裂和歌

従四位上行左近衛権少将兼安芸権介藤原朝臣定家上

春廿首

はるきぬとけさみよしの、朝ぼらけ昨日は霞む峰の雪かは
 あつたまの年のあくるをまちけらしけふたにのどをいつる鶯
 はるの色をとふひの、もりたつぬれとふたはのわかかな雪も消あへす
 もうひとつの花いろ衣たちかさねみやこそしなるき春さたりとは
 鶯
 うち渡すをち方人はこたへねと匂ひそなる野辺の梅かえ
 新古今
 梅花にほひをうつす袖のうへにのささる月の影そあらずふ
 はなのかのかすめる月にあくかれてゆめもさたかに見えぬころ哉
 もうちとりのそよ音のそれならぬわか身ふりゆく春雨のそら
 ありあけの月影のこる山のはをさらになしてもたつかすみ哉
 思たつ山のいくへもしらくもにはねうちかはし帰かりかね
 よしの山くもに心のかゝるより花のころとはすらにしるしも
 いつも見し松の色かはつせ山せくらにもる、春のひとしほ
 新古今
 白雲のはるはかさねてたつた山をくらの峯に花にはほらし
 高砂の松とみやこにことつてよおのへの桜今さかり也
 花の色をそれかこそ思をどめこかすてふる山のはるのあけほの
 春のをる花のにしきのたてぬきにみたれてあそぶそらのいとゆふ
 をのつからすこともしらぬ月はみつくなはなけの花をたのみて
 さくら花ちりしくはるの時しもあれかへす山田をうらみてすゆく
 春もおく花をしるへにやとからむゆかりの色ふちのしたかけ
 しのはしよ我ふりすて、ゆくはるのなこりやすらふ雨のゆふ暮
 夏十五首

九〇一
 九〇二
 九〇三
 九〇四
 九〇五
 九〇六
 九〇七
 九〇八
 九〇九
 九一〇
 九一一
 九一二
 九一三
 九一四
 九一五
 九一六
 九一七
 九一八
 九一九
 九二〇
 九二一
 九二二

卯花のかきねもたわにをけるつゆちらすもあらん玉にぬくまで
 もろかつら草のゆかりにあらねどもかけてまたる、ほとゝぎす哉
 あやめふくのきのたち花風ふけはむかしにならふけふのそてのか
 いか許み山さびしとらむらんさとなればつるほとゝぎす哉
 郭公しはしやすらへすかはらやふしみの里のむら雨のすう
 ほとゝぎすなをよすかにたのめとて花たち花のちりはてぬ覽
 たか袖を花櫛にゆつりけむやとはいく世とをとつれもせて
 わかしめし玉江のあしのよをへてはからねと見えぬざみたれのころ
 夏草のつゆわけ衣ほしもあへすかりねながらにあくるしのゝめ
 鶯
 片絲をよるく、峯にともす火にあはすはしかの身をもかへしを
 おきのはもしのひくく、に、ゑたて、またきつゆけきせみのは衣
 夏か秋かとへとしうたまいはねよりはなれておつるたき河の水
 いまはどて晨明の影のまきのとにさすかにおしきみな月のそら
 秋廿首

九二三
 九二四
 九二五
 九二六
 九二七
 九二八
 九二九
 九三〇
 九三一
 九三二
 九三三
 九三四
 九三五
 九三六
 九三七
 九三八
 九三九
 九四〇
 九四一
 九四二
 九四三
 九四四
 九四五
 九四六

けふこそは秋は、つせの山おろしにす、しくひくかねのをと哉
 白露に袖もくさはもしほれつ、月かけならす秋はきにけり
 秋といへはゆふへのけしきひきかへてまたゆみはりの月ささひしき
 いくかへりなれてもかなし萩原や末こそ風の秋の夕暮
 物おもは、いかにせよとて秋のよにかゝる風しもふきはしわけん
 唐衣かりいほのとこのつゆ寒み秋のにしきをかさねてそきる
 秋はきのちりゆくをのゝあざつゆはこほる、そても色そうつろふ
 あきの野になみたは見えぬしかのねはわくるをかやのつゆをからなん
 おもふ人そなたの風にとほねともまつ袖ぬるゝはつかりのこゑ
 ゆふへより秋とはかねてなかわれと月におとろくそらの色哉
 秋をへてくもる涙のますか、みきよき月よもうたかはれつゝ

おもふことまへらもしらし秋のよのち、にくたくる月のさかりは
 もよほすもなくさむむもた、心からながむる月をなごかこつらん
 さびしさも秋にはしかなげきつ、ねられぬ月にあかさむしう
 秋の夜のあまのとわたる月かけにききふしものあけかたのそら
 そのめはつるしくれをいまはまつ虫のなく／＼おしむのへの色々
 白妙の衣してうつひ、きよりまきまよふしもの色に出らむ
 おもひあへず秋ないそきそまじかの妻とふ山の小田のはつしも
 秋くれてわか身しくれとふるさとの産はもみちのあとたにもなし
 あすよりは秋も嵐のまごは山がたみとなしにちるこのは哉

冬十五首

たむけしてかひ、そなけれ神な月紅葉はぬざとちりまかへとも
 山のくり癒しくるなり秋にたにあらそひかねしまきの下葉を
 うらかれしあざちはくちぬ一年の末葉のしもの冬の下葉を
 冬はまたあさはの、らにをくしものゆきよりふかさしの、めのみち
 よしさらはよものこからしふきはらへひとほくもらぬ月をたに見む
 をとつれしまさきのかつらちりは、と山もいまはあられをそきく
 山かつのあさけのこやにたくしはのしはしと見れはくる、そら哉
 冬の夜のむすはぬゆめにふしわひてわたるをかは、氷るにけり
 寒の松はらふあらしにをくしもをうはげにわふるをしのひとりね
 たれをそ夜ふかき風にまつしまやをしまのちとりこゑうらむ見
 鏡 鏡 なかめやる夜手さむくふる雪にゆふやみしらぬ山のはの月
 新 新 こまこめて袖つらはらふかけもなしさの、わたりの雪の夕暮
 白妙にたなひく、もをふきませで雪にあまきる峯の松がせ
 庭のおもにききすはあらねと花とみる雪は春までつきてふらん
 いくかへりはるまはよそにむかへつ、をくる年のみ身につもるらむ

- 九四七
- 九四八
- 九四九
- 九五〇
- 九五二
- 九五三
- 九五四
- 九五五
- 九五六
- 九五七
- 九五八
- 九五九
- 九六〇
- 九六一
- 九六二
- 九六三
- 九六四
- 九六五
- 九六六
- 九六七
- 九六八
- 九六九
- 九七〇

恋十首

鏡 鏡 久方のあまてる神のゆふがつらかけていくよまこひわたるらん
 勅 勅 松かねをいそへの浪のうつたへにあらはれぬへきさてのうへかな
 あはれとも人はいはたのをのれのみ秋のもみちをなみたにそかる
 しふるはまけてあふにも身をかへつけれなき恋のなくさめそなき
 わくらはにたのむるくれのいりあひはかはらぬかねのをとそひさしき
 あか月はわかる、袖をとひかほに山した風もつゆこぼるなり
 まつ人のこぬ夜のかげにおもなれて山のはいつる月もうらめし
 うきはうくつらきはつらしと許も人のおほえて人をこひはや
 たれゆへそ月をあはれといひかねてとりのねをそきさよのたまくら
 見せはやなまつとせしまのわかやとを猶つれなきこと、はずとも

旅五首

草枕ゆふつゆはらふさ、のはのみ山もそよにいくよしほれぬ
 浪のうへの月をみやこのともとしてあかしのせとをいつるふな人
 いもと我といるさの山は名のみして月をそしたふ狂明のそら
 こまなつむいはきの山をこえわひて人もこぬみのはまにかもねむ
 宮ご思ふ涙のつまとなるみかた月にわれとふ秋のしほ風

山家五首

鏡 鏡 露しものをうらの山にいへるしてほさても袖のくちぬへき哉
 秋の日にみや、まいそくしつのかかへるほとなきおほはらのさと
 浪のまどに守治のさと人よるさへやねてもあやうき暮のうきはし
 しはのどのわと見ゆ許しほりせよすれぬ人のかりにもそとふ
 庭のおもはしかのふしと、あれはて、世々ふりにけり竹あめゆるかき

鳥五首

やとになくやこゑのとりはしらしきをきてかひなきあかつきのつゆ

- 九七一
- 九七二
- 九七三
- 九七四
- 九七五
- 九七六
- 九七七
- 九七八
- 九七九
- 九八〇
- 九八一
- 九八二
- 九八三
- 九八四
- 九八五
- 九八六
- 九八七
- 九八八
- 九八九
- 九九〇
- 九九一

手なれつゝ才野をたのむはしたかのきみのみよにそあはむと思ひし
君か世に霞をわけしあしたつゝのさくらにさはへのねをやなくへき
如何せむつらみたれにしかりかねのたちともしらぬ秋の心を
わかきみにあふくま河のさよちとりかきとつゝのつるあどそうれしき

祝五首

ようつ世とききはかきはにたのむ哉はこやの山の君のみかけを
あまつそらけしきもしるし秋の月のとかなるへさくものうへとは
わかきみのひかりそへはむはるの宮てらす朝日の千世の行末
おとこ山さしそふ松の枝こに神も千年をいはひそむらん
秋津嶋よもの民の戸おさまりていく万世も君そたもたむ

夏白侍 十五百番身合是也 建仁元年七月進

太上皇仙洞周詠百首應 製和歌

千出無光例知等
書出内府神歌集
乃臨時賦
藤原朝臣定家上

春廿首

春霞きのふをこそそのしるしとちのきはの山とをさかるらん
はるといへは花やはをそよよしの山さよえへぬ雪のかすむ曙
山のはに霞餅をいそけともはるにはなれぬぞらの色哉
やまごとは谷のうくひす打はふき雪よりいつるこそこのふる声
きえなくに又やみ山をうつむ覺わかなつむのもあは雪そふる
谷風のふきあけにさける梅花あまつそらなるくもやにほはむ
さとわかぬ月をは色にまかへつゝよものあらしに、ほふ梅かえ
はるやあらぬやとをかことにならいつれといつこもおなし霞むよの
月

九九二
九九三
九九四
九九五
九九六
九九七
九九八
九九九
一〇〇〇

あつまやのこやのかりねのかやむしうしく／＼ほさぬ春雨そふる
まちわひぬ心つくしのはるかすみ花のいさよふ山のはのぞら
桜花さきぬやいま白雲のはるかにかほるをほつせの山
雲の浪霞のなみにまかへつゝよしのゝ花のおくを見ぬ哉
しるしうわわかぬかすみのだえまよりあるしあはにかほる花哉
あかさりし霞の衣たちこめて袖のなかなる花のおもかけ
新夏
桜花うつろふ春をまたへて身さへふりぬる浅ちふのやと
さくら色の庭のはる風あともなしとは、そ人の雪とたに見む
花のかも風こそよみにそそぶらぬ心もしらぬふるさどのはる
とまらぬばさくら餅を色にいて、ちりのまよひにくるゝ春哉
よし野河たさついは浪せきもあへすはやくすきゆく花のころ哉
けふのみとしるてもおうれしふちの花さきがゝる夏の色ならぬかは

夏十五首

郭公まつに心のうつるよりそてにとまらぬはるの色哉
まつとせし入のためとはなかねとしける夏草みちもなきまで
時しらぬさと玉河いつとてか夏のかさねをうつむ白雲
あふびさかりねのへにほとゝきす暁かけてたれをとくらん
なをさらに山郭公なきすて、我しもとまるもりのしたかけ
ゆふくれはなくねそらなるほとゝきす心のかよふやとやしららん
またれつゝ年にまれなる郭公や月餅のこゑおしみそ
けふはいと、おなしみどりにつつもれて草の庵もあやめくくなり
あまの河やそせもしらぬさみたれに思ふもふかき雲のみお哉
袖のかを花橋におどろけはそらにありあけの月そのこれる
新夏
ひさかたのなかなる河のうかひ舟いかにちきりてやみをまつらん
夏衣たつた河らを見て見ればしのにおりは浪をほしける

一〇〇九
一〇一〇
一〇一一
一〇一二
一〇一三
一〇一四
一〇一五
一〇一六
一〇一七
一〇一八
一〇一九
一〇二〇
一〇二一
一〇二二
一〇二三
一〇二四
一〇二五
一〇二六
一〇二七
一〇二八
一〇二九
一〇三〇
一〇三一
一〇三二

なつの月はまたよるのまどながあつゝぬるやかはへのしのゝめのそ
ら

山のかげおほゆくさとにひくらしのこゑだのまるゝゆふかほの花
たかみそおなしあさちのゆふかけてまつ打なひくかもの河風

秋首

けざよりは風をたよりのしるへにてあとなき浪も秋やたつらん
みつきのまかのくすはらふきかへし衣すすき秋のはつ風
ゆふくれはをのゝしのはらしのはれぬ秋きにけりとうつらなく也
松の葉のいつともわかぬ影にしもいかなる色とかはる秋かせ
つゆをゝもみ人はまちえぬ庭のおもに風こそはらへもとあうのはき
萩原やうへてくやしき秋風はふくをすさひにたれかあかさむ
さましかのなくねのかきりつくしてもいかゝ心に秋のゆふくれ
秋さぬとすてにしらるゝゆふつゆにやかてこのまの月そやとかる
松虫の声をとひゆく秋のゝにつゆたつねける月の影哉
思われぬ人のすきゆく野山にも秋は秋なる月やすむらん
たかさこのおのへのしかの声たてし風よりかはる月のかけ哉
心のみもうこしまてもうかれつゝゆめちにとをき月のころ哉

- 一〇三三
- 一〇三四
- 一〇三五
- 一〇三六
- 一〇三七
- 一〇三八
- 一〇三九
- 一〇四〇
- 一〇四一
- 一〇四二
- 一〇四三
- 一〇四四
- 一〇四五
- 一〇四六
- 一〇四七

冬十五首

秋くれしもみちのいろをかサねても衣かへうきけふのそら哉
ふゆきぬと時雨のをどにおとろけはぬにもさやかにほるゝこのもど
のころ色もあらしの山の神な月のせきの浪におろすくれなる
かれはつる草のまかきはあらはれていはもる水をうつむもみち葉
しほれ葉やつゆのかたみにをくしもゝ猶あらしふく庭の蓬生
花すゝき草のたもともくちはてぬなれりわかれし秋をこふとて
しくれこしきの松かけつれもなくすむにほとりの池のかよひち
まきのやに時雨あられはよかれせてこほるかけひのをどつれそなき
これやさは秋のかたみのうらならむかはらぬ色をさきの月かけ
清風にやくしほけふりふきまよひたなひく山の冬ささひしき
なく千鳥袖のみなとをどひこかしもろこし舟もよるのね覺に
ことすともなくてことしもすきのとのあけておとろく初雪のそら
かたしきのとのさむしうこほる夜にふりかしくらん峯の白雪
雪ふかきまのゝかやはらあどたえてまたことゝまし春の拂
やとことにはるのかすみをまつとてや年をこめてはいそきたつらむ

- 一〇五六
- 一〇五七
- 一〇五八
- 一〇五九
- 一〇六〇
- 一〇六一
- 一〇六二
- 一〇六三
- 一〇六四
- 一〇六五
- 一〇六六
- 一〇六七
- 一〇六八
- 一〇六九
- 一〇七〇

祝五首

あめつちとどかきりなかれとちかひをさし神のみことそわか君のため
さねこしのさか木にかけしかゝみにそ君かときはのかけは見えけん
わが道をまもらは君をまもらんよはひはゆつれ佳吉の松
万代の春秋さみになつさはむ花と月とのすそ久しき
よものうみもけふりにさはふはまひさし久しきちよに君ささかえむ

- 一〇七一
- 一〇七二
- 一〇七三
- 一〇七四
- 一〇七五

恋十五首

あふことのまれなる色やあらはれんもりいてこそむる袖の涙に
たれか又物思ことはましへをさし枕ひとつをしる人にして

- 一〇七六
- 一〇七七

30 こひしぎのわひていぎなふよるくにゆきてはかへるみちのせんはら

新 ^あかたいとのあふとはなしにたまのをもたえぬ許す思みたる

一〇七九

新 ^あきえわひぬうつろふ人の秋の色に身をこからしものりの白露

一〇八〇

新 ^あ芽なれやをのすかはらかりそめにつゆわけし神は今もしほれて

一〇八一

新 ^あたつね見るつらき心のおくの海よしほひのかたのいふかひもなし

一〇八二

新 ^あ人ころかよふだちのたえしよりうらみそわたるゆめのうきはし

一〇八三

新 ^あおもかけはなれしなからの身にそひてあらぬ心のたれちさるらん

一〇八四

新 ^あおもひいてよたかきぬくの暁もわかまたしのふ月子見ゆらん

一〇八五

新 ^あわすれぬよこれはかきさりそと許の入つてならぬ思いてもうし

一〇八六

新 ^あはてはたあまのかるもをちとりにてまくらさたむるよひくそな

一〇八七

新 ^あき かけぬるはさきなためしとなかのてもなくさまなくに宿のした草

一〇八八

新 ^あ時つ風ふけるのうらにあかひてもたかためにかは身をもおしみし

一〇八九

新 ^あ久方の月そかはらてまたれける人にはいひし山のはのそら

一〇九〇

雑十首

おほかたの月もつれなきかねのをとに猶うらめしき狂明のそら

一〇九一

たつけふり野山のすゑのさひしきは秋ともわかすゆふくれのそら

一〇九二

いく世へぬかさしおくりけんいにしへにみわのひはらのこけのかよひ

一〇九三

ち ことまどめしひのくま河の水きよみ夜わたる月の影のみぞ見る

一〇九四

そらにふくおなし風そそゑたつれ峯の松かえならいそ浪

一〇九五

あさゆふはたのむとなしにおほそらのむなしきくもを打なかめつ

一〇九六

そなれ松しつえやたのしをのれのみかはらぬ色に浪のこゆるん

一〇九七

一〇九八

いたつらにあたらいのちをせめきけむながらへてこそけふにあひぬ

一〇九九

わかのうらにかひなきもくつかきつめて身さへくちねと思ける哉

一一〇〇

内大臣家百首 建保三年九月十二夜攝

詠百首和歌

参議

春十五首

早春

うくひすもまたいてやらぬはるのくもことしともいはず山風ぞ吹

一一〇一

あはゆきの今もふりしくときは山をのれきえてやはるをわくへき

一一〇二

野鷲

春くれはのへにまつさく花のををしるへにきるるうくひすのこゑ

一一〇三

海霞

かさすてふ浪もてゆへる山やそれ霞ふきとけすまのうら風

一一〇四

関霞

しるしらぬ相坂山のかひもなし霞にすくるせきのよそめは

一一〇五

朝若菜

たかためとまたあさしものけぬかうへにそてふりはへてわかなつむ

一一〇六

庭梅

袖ふれしやとのかたみの梅かえにのころにほひよ春をあらすな

一一〇七

夜梅

ひさかたの月やはにほふむめの花そらゆくかけをいろにまかへて

一一〇八

夕陽雁

くれぬなり山木とまきかねのをとに峯とひこえてかへるかりかね

裁花

一一〇九

ふりはつる身にこそまたね桜花うへまぐやとの春なわすれそ

待花

一一一〇

霞たつ山のやまもりことつてよいくかすきての花のさかりと

尋花

一一一一

鳥の声霞の色をしろへにておもかけにほふはるの山ふみ

翫花

一一一二

かざしおる花の色かにつろひてけふのこよひにあかねもう人

惜花

一一一三

さえすともあすは雪とや桜花くれゆくそらをいかにとゝめん

残春

一一一四

統吉
春はたゞ霞餅の山のはに眺かけて月いつるころ

夏十首

一一一五

首夏

あはれをもあまたにやらぬ花のかの山もほのかにのころみか月

夏草

一一一六

さゆり葉にまじる夏草しけりあひてしられぬ世にぞくちぬと思し

初郭公

一一一七

山のはあざけのくもにほどきすまたさとなれぬこそそのふるこゑ

續郭公

一一一八

よそにのみきかなやまむ郭公たかまの山のくものまぢかた

杜郭公

一一一九

ほとんきすこゑあつはる衣手のもりのしづくを涙にやかる

池宮浦

一一二〇

六月ぎぬのきのあやめのかけそへてまうしいつかとにほふ池水

山五月雨

一一二二

峯つゞきくものたゞちにまごちてとばれむものかさみたれのそら

故郷橘

一一二三

たらはなの袖のかはかり昔にてうつりにけりなふるきみやこは

沢堂

一一二四

せりつみしきはへのほたるまのれ又あつはにもゆとたれに見す覽

樹陰納涼

一一二五

はつせのやゆつきかしたにかくろへて人にしられぬ秋風ぞ吹

秋十五首

一一二六

あちきなくさもあらぬ人のね覺まで物思やむる秋のはつ風

初秋

一一二七

秋はきのゆくてのにしきこれも又ぬさもとりあへぬたむけにぞおる

行路秋

一一二八

山家虫

松虫の声もかひなしやとなからたつねは草のつゆの山かけ

夕萩

一一二九

人こころいかにしほれとおきののはの秋のゆふへにそよきそわけん

谷鹿

一一三〇

さをしかのあざゆくたにのたまかつらおもかけさらすつまやこふら

ん

一一三一

原鹿

みかのはらぐくにのみやこの山こえてむかしやとまきさしかの声

鳥舟

一一三二

秋は又ぬれこし袖のあひにあひてをしまのあまき月になれける

一一三三

江月

あかす夜は入江の月の影許こきいてし舟のあとのうき浪

一一三三

蒲月

ひさかたの月のひかりを白妙にしきつものうらの浪の秋風

一一三四

橘月

はるかなる峯の梯めぐりあひてほどはくもるの月やさやけき

一一三五

河月

ひかりさすたましま河の月清みをとめの衣袖さへそてる

一一三六

暁橋衣

なかき夜をつれなくのころ月のいろにをのれもやます衣うつなり

一一三七

蓮村紅葉

山本の紅葉のあるしうとけれとつゆもしくれもほどは見えける

一一三八

古寺紅葉

そはたつる枕におつるかねのまともみちをいつる峯の山まら

一一三九

暮秋

あさなくあへすちりしくすのはにをきさふしもの秋すすくな

一一四〇

冬十首

かりのこす田のものもくもむらうにしくれてはる冬はきにけり

一一四一

田家時雨

あざしもの花のうすきをきてゆくをちかた人のそてかどぞ見る

一一四二

野徑霜

水椰寒葎

一一四三

冬の日のみしかきあしはうらかれて浪のとまやに風そよはらぬ

一一四三

寒夜千鳥

浦千鳥方もさたぬすこひてなくつまふく風のよるそひざしき

一一四四

湖氷

鏡山夜わたる月もみかゝれてあくれとこぼるしかのうら波

一一四五

林雪

はやしあれて秋のなげけも人とはす紅葉をだきしあとの白雪

一一四六

深更鈴散

あけ方もまたと山のかからしにあられふませなひくむらくも

一一四七

浜雪

大伴の御津のはま風よきはらへ松とも見ええいつつむ白雪

一一四八

因雪

けさほ又めとこまたゆち水くきのとかのやかたの雪のよりほも

一一四九

歳暮

ゆく年よ今ごへをくりむかふてふ心ながさをいかに見ららん

一一五〇

恋廿五首

寄名所

一一五一

くるゝ夜は衛士のたく火をそれと見え雲のやしまもみやこならねは

一一五二

かひかねにこの葉ふきしく秋風も心の色をえちやつたふる

一一五三

龍田山ゆふつけ鳥のおりはへてわか衣手に時雨ふるころ

一一五四

わか袖にむなしき浪はかけそめつ契もしらぬとこのうら風

一一五五

しられしな霞のしたにこかれつゝきみにいふきのさしもしのふと

一一五七

妻の屋に夢やまかふあまやたく思ひもこひも夜はほもえつゝ

一一五八

白玉のをたえのはしの名もつらしくたけておつる袖の涙に

一一五九

いまよりのゆきもしらぬ逢坂にあはれなげきのせきをすへつる

一一六〇

玉匣あくればゆめのふだみかたふたりやそての浪にちちなむ

一一六一

雑歌

あらはれて袖のうへゆく名とり河今はわか身にせく方もなし
思いつるのちの心にくらふ山よそなる花の色はいろかは

如何せんうらのはつしまはつかなるうつゝのちはゆめをたにみす

たのめをさしちのせの山のひとことや恋をいのりの命なりける

たつねぬは思しみわの山ぞかしわすれねもどのつらきおもかけ

雑歌

さとの名を身にしる中のちきりゆへ枕にこゆる宇治の河なみ
やすらひにいてけん方もしらとりとは山松のねにのみそなく

しるへせよむしわけのせとの松の風ほかゆく浪のしらぬ別に

かたみこそわたのおほのゝ萩の露うつろふ色はいふかひもなし

袖のうらかりにやとりし月草のぬれてのちを猶やたのまむ

わすれかひそれも思ひの大ねたえて人を見ぬめのうらみてそぬる

雑歌

いのちたにあらはあふせをまつら河かへらぬ浪もよとめこそ思
まさのはのふかきまつての山におふるこけのしたまて櫓やうらみむ

わすられぬまゝのつきはしおもひねにかよひし方は夢に見えつゝ

雑世五首

旅五首 春夏秋冬

時のまも人を心にをくらさて霞にまじるはるの山もと

山ちゆく雲のいつこのたひまくらふすほともなき月ぞあけゆく

草のいほやくるゝ夜この秋風にさそはれわたるたひのつゆけざ

きたへの衣手かれていくかへぬ草まふゆのゝゆふくれのぞら

おもかけにあらぬ昔もたらそひて櫓しのゝめそたひはかなしき

述懐五首 山河海皇廟

くるとあくと思し月日すきのいほの山ちつれなく年はへにけり

きえせねはあはれいくよのおもひ河むなくこえしせゝのうき波

海渡るうらゝ舟のいたつらにいそちをすきてぬれし浪哉

一一六二

一一六三

一一六四

一一六五

一一六六

一一六七

一一六八

一一六九

一一七〇

一一七一

一一七二

一一七三

一一七四

一一七五

あれまくや伏見のさとのいてかてにうきましらてそけふにあひぬる

今は又關のふち河たえずともくにむくむむたのめこそおもへ

祝五首 天日月星堂

くもりなきみどりのそらまあふきても若かやちよまついのる哉

みかさ山まつこのまをいつる日のさしてちとせの色は見ゆらん

秋の月ひさしきやとにけなひくまかきの竹はようつよやへむ

くもりなき千世のかすくあらはれてひかりさしそへほしのやとり

山人のよはひまきみのためしにてちとせのさかにかゝるしうくも

神祇五首 伊勢 石清水 賀茂 春日 住吉

身をしれはいのるにはあつたのみこしいすゝ河波あはれかけり

石清水月には今もちきりまかむみたひかけ見し秋のなかはを

神も見よかもの河なみゆきかへりつかふるみちにわけね心を

いのりをさしいかなるすゑにかすか山すてゝひさしきあどのこりけ

かたはかり我はつたへしわかみちのたえやはてぬるすみよしの神

祝歌五首 大日 釈迦 阿弥陀 薬師 弥勒

あまつそらひかりをわかつよつの身になにの草木ももるゝものかは

きさらきのなかはのそらまかたみにてはるのみやをいてし月かけ

こゝのへの花のうてなをさためすはけふりのしたやすみかならまし

とおあまりふたつのちかひきさよくしてみかけるたまのひかりをぞし

花にほ小四つのおほそらとをからてあか月またぬあふことも哉

一一八四

一一八五

一一八六

一一八七

一一八八

一一八九

一一九〇

一一九一

一一九二

一一九三

一一九四

一一九五

一一九六

一一九七

一一九八

一一九九

一二〇〇

内裏百首 名所

歌夫兼行中殿室
雄為密儀

初冬同詠百首和詠

参議藤原定家

春廿首

音羽河

まとは河雪けの浪もいはこえてせきのこなたにはるはきにけり

一二〇一

玉嶋河

むめかやまつつるらんかけきよたましま河の花のかみみ

一二〇二

高砂

それなからはるはくもめにたかさこの霞のつへの松のひとしほ

一二〇三

春日野

わかなたつむとふひのもりかすかのにけふる雨のあすやまつらん

一二〇四

三輪山

いかさまにまつとも誰かみわの山人にしらねやとの霞は

一二〇五

葛木山

あまやきのかつらき山のなかさ日はそらも縁にあそふいとゆふ

一二〇六

牛向山

たつ嵐つれの神にたむけ山花の錦の方もさためす

一二〇七

伊勢海

いせのうみたまる浪にさくらかひかひあるうらのはるの色哉

一二〇八

志賀浦

さんなみやしかの花ぞのかすむ日のあかね匂ひにうら風ぞ吹

一二〇九

三嶋江

みしま江の波にさおさすたをやめの春の衣の色ぞうつろふ

一二一〇

塩竈浦

しほかまやうらみでわたるかりかねをもよほしかほにかへる浪哉

一二一一

宇津山

うつの山わかゆくさきもことまきつたのわかにはる雨ぞふる

一二一二

葦原里

あしやのわかすむ方のをそそくらほのかにかすむかへるさのそら

一二一三

吹上浜

けそみるかさしの浪の花のうへにいとほぬ風のふきあけのはま

一二一四

湯峯三崎

花とりのにはひもこゑもさもあらはあれゆらのみさきの春のひくら

一二一五

忍山

いはつしいはてやそむるしのふ山心のおくの色をたつねて

一二一六

水無瀬河

春の色をいくようつ世かみなせかはかすみのほらのこけのみとりに

一二一七

大波浦

つらからぬ松もこぶらくおほよとの霞ほかりにかるうらなみ

一二一八

田籠浦

たこのうらのなみもひとつにたつくもの色わかれゆくはるのわけほ

一二一九

の

末松山

あつそゆみすゑの松山はるはたけふまでかすむなみの夕暮

一二二〇

夏十首

大井河

おほる河かはらぬるせきまのれさへ夏きにけりと衣ほす也

一二二一

篠田社

道のへの日かけのつよくなるまにならずしのたのもりのしたかけ

一二二二

糖名野

みしかよのゐなのさゝはらかりそのにあかせはわけぬやとはなくとも

一二三三

御裳瓊河

月やとるみもすそ河の郭公秋のいくよもあかすやあらまし

一二三四

伊香保沼

唐衣かくるいかほのぬま水にけふはたまぬくあやめをそひく

一二三五

天香具山

五月雨はあまのかく山ぞらとちてくもそかゝれる茶のま椿

一二三六

大江山

ゆふすゝみおほえの山の玉かつら秋をかけたる露ぞほろゝ

一二三七

難波江

をしてくるやなにはほり江にしくたまの夜の光はほたるなりけり

一二三八

美豆御牧

瘠するをちかた人のそてかとやみつのにしろきゆふかほの花

一二三九

松浦山

せみのはの衣に秋をまつらかたひれふる山のくれそすゝしき

一二四〇

秋甘首

はつせめのならす夕の山風も秋にはたへぬしつのをたまき

一二四一

泊瀬山

心あてのおもひのいろそたつた山けさしもそのし木々の下露

一二四二

龍田山

たひ衣またひとへなる夕霧けけふりふきやるすまのうら風

一二四三

歐磨浦

宮城野

一二四六

秋にあひて身をしる雨としたつゆといつれかまさる雪きのはら

一二三四

水基岡

水くきのをかのまくすをあまのすむ里のしるへと秋風ぞふく

一二三五

小倉山

まくら山秋のめはれやのこらましをしかのつまのつれなからすは

一二三六

宇治河

河波もまつよるすきはとをさかれやそうち人の秋の枕に

一二三七

常磐社

はつかりのきなくときはの杜の露ぞぬしつくも秋は見えけり

一二三八

三堂山

みむろ山しくれもやらぬくもの色のまのれうつろふ秋の夕暮

一二三九

高円野

おほぞらにかゝれる月もたかまどののへにくまなき草の上の露

一二四〇

伊駒山

いこま山あらしも秋の色にふくてそののいとよるそかなしき

一二四一

生田池

しくれゆくいくたのりのこからしに池のみくさも色かはるころ

一二四二

淨見閣

きよみかたひまゆくこまもかけうすし秋なき浪の秋の夕ぐれ

一二四三

武蔵野

たかゝたによるなくかりのねにたてゝ涙つつろむむさしのはら

一二四四

伊吹山

秋をやく色にそ見ゆるいふき山もえてひざしきしたのおもひも

一二四五

佐良茶奈里

はるかなる月のみやこにちきりありて秋のよあかすさらしなのさと

一二四六

白河関
しら河のせきのせきもりいざむとも時雨る秋の色ほどまうし

一二四七

四幡山
まのよかも秋のたのもにつゆをましいなほの山も松の白雪

一二五九

野嶋崎

おもかけはひもゆふくれにたちそひてのしまによする秋のうら波

一二四八

鐘山
かすみ山うつれを浪のかげながらさらさへこほるありあけの月

一二六〇

明石浦

燈のあかしのおきのもも舟もゆく方たどる秋のゆふくれ

一二四九

伏見里

ふえ竹のふしみのさとは名のみしていつれのよにかねをもたつへき

一二六一

阿武隈河

たちくもるあふくま河のさりのまに秋をはやらぬせきもすへなむ

一二五〇

霞浦
はるかすみかすみのうらをゆく舟のよそにも見えぬ人をこひつゝ

一二六二

冬十首

をとまかふこのは時雨をさきませていはせにそむる清蓮のなみ

一二五一

石瀬江
かみなひのいはせのりのいはすともしかかしたにつもるくらほを

一二六三

小塩山

あざしも、しらゆふかけておほはらやをしほの山に神まつるゝろ

一二五二

筑波山
あしほ山やます心はつくはねのそかひにたにも見らくなきころ

一二六四

住吉浦

あはらしまむかひのくものむらしくれそめもをよはねすみよしの松

一二五三

袖浦
そてのうらたまたらぬたまのくたけつゝよせてもととくかへる浪哉

一二六五

交野

かり人のかたの、みゆき打はらひとよのあかりにあはむとやする

一二五四

益田池
人心いとゝますたの池水にうへはしける名をうらみつゝ

一二六六

田養嶋

をきあかすしもそかさなるたひ衣たみのゝしまはきてもかひなし

一二五五

高師浜
あたなみのたかしのはまのそなれ松なれすはかけしわれこひめやも

一二六七

有乳山

あらし山ねのこからしききたてゝくものゆくてにおつる白雪

一二五六

阿波手杣
かたいとあだのたまのをよりかけてあはてのよりにつゆまえねとや

一二六八

浮嶋原

ふしのねにわなれし雪のつもりきてをのれ時しるうきしまかはら

一二五七

志賀須加渡
秋風になくねをたつるかすかのわたりし浪におとるそてかは

一二六九

安達原

そなたより霞やしたにいぞくらんあたちのまゆみはるはとなりと

一二五八

浪名橋
あつまちやはまなのほしにひくこもさそまらわたる逢坂のせき

一二七〇

磯間浦

梓弓いそまのうらにひくあみのわにかけなからあはぬ恋哉

一二七一

不冬山

あまのはらぶしのしは山しはらくもけふりたえせず雪もけなくに

一二八三

守山

終夜夢ぎへんめもる山はうちぬるなかまたのみやはする

一二七二

遷山

いかはかりふかきなかとてかへる山かさなる雪をどへとまつらん

一二八四

佐野布奈橋

ことつてよまのふなはしはるかなるよまの思ひにこかれわたると

一二七三

海橋立

むはたまの夜わたる月のすむ里はけにひさかたのあまのはしたて

一二八五

安積沼

如何せんあさかのぬまにおふとそく草葉につけておつる涙を

一二七四

明日香河

さくれいしはいはほとなりてあすか河ふちせの声をきかぬみよ哉

一二八六

松嶋

ふくる夜を心ひとつにうらみつゝ人まつしまのあまのもしほ火

一二七五

鳥羽

すゑとまきとはたの南しゆしよりいく世の花にみゆきふるらん

一二八七

緒絶橋

ことのねも嘆くはるちきりとてをたえのはしになかもたえなき

一二七六

辰布

しきしまのみちにわか名はたつのいちやいさまたしらぬやまこと

一二八八

三熊野浦

時のまのよはの衣のはまゆふやなげきそふへきみくまのうら

一二七七

吹飯浦

こすなみにわか世ふけるのうらみきてうちぬるゆのもこのころそ見

一二八八

鳴海浦

よそ人になるみの海のやへかすみわすれすとてもへたてはてそき

一二七八

布引滝

ぬのひきのたきにもとまあらそひてわか年波のいつれたかけん

一二九〇

二見浦

ふたみかたいせのはまをききたへの衣手かれてゆめもむすはず

一二七九

長柄橋

さもあらはあれなのみなからはしくらぐちすは今の人もしのは

一二九一

名取河

なとり河心にくたすむもれ木のことほりしらぬそてのしからみ

一二八〇

玉河里

手つくりやささらすかきれの朝露をたらぬぎこのぬ玉河のせと

一二九二

雑甘首

よしの河いはとかしはをこす浪のときはかきはそわかきみのみよ

一二八一

生浦

なにゆへかそのみるめもおふのうらにあふことなしのなにはたつ

一二九二

鈴鹿河

すゝか、はやせせふみわたるみてくらも君か世なかく千世の長月

一二八二

らん

佐夜中山

関の戸をききそひし人はいてやうてありあけの月のさやの中山

一三九四

嵯峨野

むすひをさし秋のさかのゝいほりよりとこはみさはのつゆになれつ

一三九五

角太河

水くきのあとかきなかつゝみた河ことつてやらむ人もとひこす

一三九六

志加麻布

はれぬまにまつあさぎりをたちこめてしかまのいちにいつるさと人

一三九七

若浦

よりくへき方もなきさのもしほ草かきつくしてしわかのうら波

一三九八

相坂園

きみに猶あふさか山もかひそなき杉のふる葉に色し見えねは

一三九九

御津浜松

まちこひし昔は今もしのはれてかたみひさしきみつのはま松

一四〇〇

春日同詠百首應 製和歌

参議従三位行治都御兼侍従伊豫権守臣藤原朝臣定家上

春廿首

はるかすみたつと山のあしたよりさきあへぬ花を雪とやは見る

一三〇一

あや日すかすかのをのゝをのつからまつあらはるゝ雪のしたくさ

一三〇二

あしかきはまらかき冬の雪なからひらけぬ梅にうくひすそなく

一三〇三

梅花にほふやいつこもかゝるみ山の松はゆきもけなくに

一三〇四

むはたまの夜のまの風のあざといてにおもふにすきて匂ふ梅かえ

一三〇五

くるとあゝこのかれね花に鬚のなきとつろふこゑなをしへぞ

一三〇六

あうたまのこげのみとりにはるかけて山のしづくも時はしりけり
浅緑霞なひく山かつの衣はるさめ色にいてつゝ

一三〇七
一三〇八

あおによしならのみやこの五柳色にもしるくはるはきにけり
峯の雪とくらむ雨のつれくと山へもよおす花のしたひも

一三〇九
一三一〇

昨日けふ山のかひよりしらくもたつたのさくら今かきくらん
みよしのよしのは花のやとそかししてもふりせすにほふ山哉

一三一一
一三一二

桜花さきぬるころは山なからいしまゆくてふ水のしら浪
もんちとりさへつる春のかすくゝにいくよの花の見てふりぬらむ

一三一三
一三一四

花の色にひどほるまけよかへる雁こししちのすらたのわして
なかつゝかすめる月はあけはてぬ花の匂ひも里わかぬころ

一三一五
一三一六

山のはをわきてなかむる春の夜に花のゆかりのありあけの月
ちる花のつれなく見えしなとりとてくるゝもおしくかすむ山かけ

一三一七
一三一八

色まかふのへのふちなみ袖かけてみかりの人のかさしおららし
とはゝやな花なきさとにすむ人も春はけふとや猶なかむらん

一三一九
一四二〇

夏十五首

春の色にせみのは衣ぬきかへて初こゑをそきほとゝきす哉

一三二一

しのはるとときはの山のいはつゝし春のかたみの数ならねとも

一三二二

物ごとしくれのわきし松の色をひとつにそむる夏のあめ哉

一三二三

郭公たひなるけさのはつこゑにまつ里見えよのきの橘

一三二四

ほとゝきす心つくしの山のはをまたぬにいづるいさよひの月

一三二五

いたつらにくもる山のまつのはの時すともなき五月雨のぞら

一三二六

あやめ草ふくや七月のなき日にしはしをやまぬのきの玉水

一三二七

秋たむいなのは風をいぞくとてみしふにまじる田この衣手

一三二八

あたらしやうかのはのかかりさしはへていとふかはせのありあけの月

一三二九

さゆりはのしらねこひもある物を身よりあまりてゆくほたる哉

一三三〇

よそへてのかひこそなけれまつ人はこそすのとこ夏花にやけとも
夏衣かとりうらのうた、ねに浪のよる／＼かよふ秋風

このまもるかきねにうすきか月の影あらはるゝゆふかほの花
ゆふたらの雲ふく風の時のまに露ほしはつるまのゝしのはら
兼あすか、はゆくせの浪にみまきしてはやくそ年のなかはすきぬる

秋廿首

此等志却似秋殿舞昇後見付可恥

さらぬたにわたにちるてふ桜蘇の露もたまらぬ秋のはつ風
たなはたの手たまもゆらにをるはたをおりしもならふ虫の声哉

わかやとは秋のしらつゆあともなしたれかとはむ野へのふるみち
おほかたにつもれば入のと許になかめし月も袖やぬれけん
兼あはれのみやとしのはに色まさる月とつゆとのへのさゝはら

秋後

秋の月河をとすみてあかす夜にをちかた人のたれをどふらん
袖のうへに思われしとのへともたへすやとかる月のかけかな
あつまやのゝきのほどなきいたひさしいたくも月になれにけるかな
まところまなむる月のあけかたにね覚やすらん衣うつ也

兼

さをしてゆくたかゝよひちのあさ露草の枕もしほる許に
さをしかのしからむはさきも時すきてかれゆくををのをうらみてまなく
ひきむすふかりほの庵も秋くれて嵐によはき松虫のこゑ
秋の色のめにさやかなる書里になきてうつらの誰しのふらん

まろかななるつゆやくさはにぬくたまを今はせきあへぬ初しくれ哉
かりかねの涙のつゆのたまなからぬきもさためするるにしき哉
もる山のしくれぬ秋を見てしかな心つからやもみちはつるこ
ちきりありてうつろはむと白霜の紅葉のしたのほになきけん

なか月の紅葉の山のゆふしくれはるゝひかけもくもはすめけり
兼泉河日もゆふくれのこまにしきかたえおちゆく秋のもみちは

一三三一 このほもて風のかけたるしからみにさてもよとまぬ秋のくれ哉
一三三二 冬十五首

一三三三 こからしものりのすゑのあさな／＼なにあらはるゝ神な月哉
一三三四 風きむみ、ほのうらへをこく舟に山のこの葉のきほひかほなる
一三五五 とまうしなよもの時雨のふるさこゝなりにしなる霜のくちは、
かさゝきののはかひの山の山かせのはらひもあへぬしものうへの月
にほとりはたたまものやともかれなくにたのみしあしそおはましら
ぬ

一三五六 冬草をむすぶもあたにあかす夜の枕もしらすあられふる也
一三三七 色見えぬ冬の嵐の山風に松のかれはす雨とふりける
一三三八 ならしはもかれゆくきゝ、す影をなみたつやかりはのまのかありかま
一三三九 はまゝつのねられ浪のとまやかた權をそふるさよちとり哉
一三四〇 身をしほるすみのやすきをうれへにて氷をいそくあざの衣手
一三四一 身にはかたもとよりまかふ草のほすゑをしまみはつ雪をふる
一三四二 兼おけぬとていてつる人のあともなしたゝ時のまにつもるしら雪
一三四三 とはるゝをたれ許とやなかむ雪のあしたのいはのかけみち
一三四四 いとしくふりそふ雪にたにふかみしられぬ松のうつもれぬらん
一三四五 むかひゆくむすちのさかのちかければあはれも雪も身につもりつゝ
一三四六 兼

一三四七 今そおもふいかなる月日ふしのねの峯にけふりのたちはしわけん
一三四八 きのふけふくもはたてまなむとて見もせぬ人の思はしる
一三四九 はつかりのとわたる風のたよりもあらぬおもひをたれにつたへむ
一三五〇 まところまぬしもまよくよはのもゝはかきはねかくしきのくたけてまな
一三五一 兼

兼

一三五二 秋夜月とうれへてねをきなくいのちにむかふ物思ふとて
一三五三 兼

一三五四 兼

一三五五 兼

くる、夜はおもかけ見えてたまかつらならぬこひする我やかなしき
 袖のうへもこひそつもりてふちとなる人を見ねのよそのたぎつせ
 いかにしてむかひのまかにかるくさのつかのまにたにつゆの影みむ
 如何せん浪さす袖にちるたまのかすにもあらぬしつのをたまき
 夢といへといやはかななる春の夜にまよふた、ちは見てもたのます
 いしはしるたきある花のちきりにてさそは、つらし春の山かせ
 わくらはにかよふ心のかひもあらしたのむよしの、かさしはかりは
 ねにたつるかけのたれおのたれゆへかみたれて物は思そめてし
 秋の、におはなかりふくやとよりもそてほしわふるけさのあざつゆ
 したひものゆふてもたゆきかひもなしわする、くさをきみやつけ、
 む

雑十五首

あけぬとてゆふつけどりのこさすなりたれか別のそてぬらすらん
 なかぬするけふもいりあひのかねのをとに通ゆくかたを身にかせへ
 つ、
 山ぞとは袖さひしとそたちかへるあくれはいやく心やすまて
 よそののみ、山のすきのつれもなくもとの心はあらすなりつ、
 それもとうし心なくさむ海山は身のよるへとも思ならはて
 心からいきうしといひてかへるごもいさめぬせきをいてそわつらふ
 かきやれはけふりたちそふもしほくさあまのすさひにみやこ、ひつ
 浪枕はまかせしうくやとる月までわかれのかたみかほなる
 人もわかす山らしくれてゆく、もをもなふ峯の袖のしつくは
 たまほこやたひゆく人はなへて見よくにさかへたる秋つしま我
 きみか世のあめのうるひはひろけれと我そめくみの身にあまりぬる
 いかにしてくちにしたにのこのもとにみちあるみよの春をまはけむ

- 一三七六
- 一三七七
- 一三七八
- 一三七九
- 一三八〇
- 一三八一
- 一三八二
- 一三八三
- 一三八四
- 一三八五
- 一三八六
- 一三八七
- 一三八八
- 一三八九
- 一三九〇
- 一三九一
- 一三九二
- 一三九三
- 一三九四
- 一三九五
- 一三九六
- 一三九七

紫の色でままはしらざりきみよのはしめのあまのは衣
 わかのうらになきてふりにし、ものつるこのころ見えて心やすめて
 いのりをきしわかふるさこのみかさ山君のしるへを猶おもふ哉

先標二百首之愚野有結春事
 仍可謂
 之初学建保四年書三卷之家

集彼是之間再居捨遣之官
 故為此草名

建保四年三月十八日書之
 参議治部卿兼侍從藤(花押)

関白左大臣家百首 貞永元年四月 権中納言定家

霞

しらざりき山よりたかきよはひまで春の霞のたつを見んども
 みよし野は春のかすみのたちとにて消ぬにきゆる峯の白雪
 いっしかと宮この、へはかすみつ、わかなつむへき春はきにけり
 たつぬともあひ見むものか春さてはふかき霞のうらははつしま
 いくはるのかすみのしたにうつもれてをどうの道のあとをとらむ
 桜
 ちはやふる神世のさくらなにゆへによしの、山をやと、しめけむ
 さくら花まちいつるはるのうちをたにこふる日おほくなど匂ふらん
 たつねみる花のころもかはりけり身はいたつらのなかめせしまに
 くものうへちかきまもりにならなれしみはしの花のかけそこひしき
 疾のおもは柳さくらをさまませむはるのにしきのかすならずとも

- 一四〇一
- 一四〇二
- 一四〇三
- 一四〇四
- 一四〇五
- 一四〇六
- 一四〇七
- 一四〇八
- 一四〇九
- 一四一〇

かすまざるわかあたらたまの年ふれはありしよりけにおしきはる哉
雪とふる花こそぬぞのかとしてしたふあとなき春のかへるぞ
にほふより春はくれゆく山ふきの花こそ花のなかにつらけれ

ちるはなのくものはやしもあれば今はいくかの春ものころし
わすられぬやよひのぞらのつらみより春のわかれ秋にまされる

郭公

たれしかもはつねくらむ郭公またぬ山ちに心つくさせ
ほととぎすをのかさ月をつれもなく猶と哀おしむ年もありけり
山かつらあけゆくもにほととぎすいつるはつねもみねわかるなり
あちなきまぢかた人の郭公それともわかぬへのゆふくれ
袖のかの花にやとかれほどとぎす今もこひしきむかしとおもは

五月雨

ぬきもあへすこほるゝたまのをほたえぬさみたれそむるのきのあや
ぬに
五月雨の日かすもくもかさなれは見らくすくなきよもの山のは
さみたれのくものまきれに中たえてつゝきも見えぬ山のかけはし
みわの山さ月のぞらのひまなきにひはらのこゑを雨をそふなる
たまほこやかよふたゝちも河と見てわたらぬなかのさみたれのころ

早秋

くれかたきはるのすかのねひきかへてあくるよまそ秋はきにけり
秋きぬとおきのは風はなるなりひとそぞとはねたそかれのぞら
風のをどの猶いうまざるゆふへ哉ことしはしらぬ秋の心を
きのふけふあさけはかりの秋風はさそはれわたる木々のしらつゆ
手なれつるねやの扇をさしよりとこもまくらもつゆほれつゝ

とぎわかすやらゆく月の秋の夜をいかにちきりてひかりそふらん
したとさもおおふしまの月の色に身をよましおるとこの秋風
むれしおもふくさばにやつるのきはよりありしなからの秋のよの月

ななき夜の月をたもとにやとしつゝわすれぬこととたれにみたらん
秋の月たまきはるよのなそちにあまりてものはいまそかなしき

紅葉

山ひめのこきもすすきもなぞへなくひとつにそゆぬよものもみち葉
やま入のうたひてかへる夕よりにしきさいそくみねのもみちは
しくれつゝそてたにほぎぬ秋の日にさこそみむろの山はそむらぬ
たつた山神のみけしにたむくとやくれゆく秋のにしきまをらん
今はとて紅葉にかざる秋の色をそそともなしにはらふこからし

水

こほりあておきなか河のたえしよりかよひしにほのあとを見ぬ哉
せたえしてみなはわかるゝ涙河そともあらはに水とちつゝ
冬の夜のなかさかきりはしられにぎねなくにあくるそてのつらゝに
そてのうへわたるをかはをどちはてゝそらふく風もこぼる月かけ
氷のみむすぶさ山の池水にみくもりもはるのくるをまつらし

雪

おいらくは雪のうちにそ思ひしるとふ人もなしゆく方もなし
いたつらに松の雪こそつもるらめわかふみわけしあけほの山
いそ神ふるのはゆきの名なりけりつもる日かすをそらにまかせて
藤かともせとの名のみやのころらん雪もあとなきをのゝ浅茅生
たれはかり山ちをわけてとひくらむまた夜はふかき雪のけしきに

忍恋

- 一四二一
- 一四二二
- 一四二三
- 一四二四
- 一四二五
- 一四二六
- 一四二七
- 一四二八
- 一四二九
- 一四三〇
- 一四三一
- 一四三二
- 一四三三
- 一四三四
- 一四三五
- 一四三六
- 一四三七
- 一四三八
- 一四三九
- 一四四〇
- 一四四一
- 一四四二
- 一四四三
- 一四四四
- 一四四五
- 一四四六
- 一四四七
- 一四四八
- 一四四九
- 一四五〇

くらなしの色のやちしほこひそめししたのおもひやいはてはてなん
水くきの人つてならぬあとにたにおもふころはかきもなかぞす
うへしけるかきねかくれのをきまはらしられぬ恋ほうきふしもなし
白露のをくとはななくとはかりもゆめのためちやこかよふらん
ことうらにるやしほ木の名にたてよもえてかくれぬけふりなりと
も

不遇恋

よりかけてまたてになれぬたまのをのかたいとなからたえやはてな
ん

夜なくの月もなみたにくもりにさかけたに見せぬ人をさふとて
名とり河心のとほむことのはもしらぬあふせはわたりかねつ、
あまのかるよそのみるめをうらみにてよるはたもにかゝるなみか
は

後朝恋

わかこひよなにゝかゝれる命とてあはぬ月日のせらにすくらむ
今のまのわか身にかきるとりのねをたれうき物とかへりそめけむ
おきわひぬななき夜あかぬくろかみの袖にこぼる、つゆみたれつ、
せきもりの心もしらぬわかれにはかならずたのむこのくれもなし
あさつゆのをくままつまのほどをたに見はてぬゆめを何にたとへむ
はしめよりあふはわかれとさゝながら嘆しらて人をこひける

遇不逢恋

いのちとてあひ見むこともたのまれすうつる心の花のせかりは
はるかなる人の心のもろこしはさばくみななどにことつてもなし
はかなしなゆめにゆめ見しかけうふのそれも絶ゆる中の契りは
海とのみあれぬとこのあはれわか身さへうきてとたれにつたへむ

絶句

怨恋

色かはるみのゝなか山秋こえて又とをさかるあふさかのせき
をのれのみあまのさかてをつつたへにふりしくこのはあどたにもな
し
あけぬなりまのか心のあたら夜は昔むすはぬちきりしうれて
おもふともこふともなにかひかねよまほりふせる山をへたて、
なれし夜の月餅こ身にはそへぬれてもぬるゝそてにやとりて
道のへのひとことしけき思草しものふりはと朽そてはぬる

旅

みやこいて、あさたつ山の大むけより露をきとめぬ秋風そふく
ゆふ日かけさすやをかへの玉簪を一夜のやとゝたのみてそかる
ふるさとにとまるおもかけたちそひて旅には恋の道すはなれぬ
なくさすすいつれの山も住なれしやとをはずすの月のたひねは
ふしなれぬはまゝつかねのいは枕そて打ぬらしかへるうき涙

山家

猶しはし愛るるたにをたちかへりみやこの月にいつる山みち
松風のそとにすみけむ山人のものと心は猶やしはん
月にふくあらし舞やむかへけんみなみの山のしものふるみち
たにこしのまはしのゝきのゆふけふりよすめはかりは往うからしや
とこなるゝ山したつゆのおき臥に袖のしつくは宮こにもにす

眺望

もゝしきのとのへをいつる夜もくはまたねにむかふ山のはの月
ふきはらふもみちのうへのきりははれて峯たしかなるあらし山哉
泉河ゆきまのふねはこきすきては、そのもりに秋やゝすらふ
つのかにのこややく花といまも見るいこまの山の雪のむら瑠

- 一四五
- 一四六
- 一四七
- 一四八
- 一四九
- 一五〇
- 一五一
- 一五二
- 一五三
- 一五四
- 一五五
- 一五六
- 一五七
- 一五八
- 一五九
- 一六〇
- 一六一
- 一六二
- 一六三
- 一六四
- 一六五
- 一六六
- 一六七
- 一六八
- 一六九
- 一四七〇
- 一四七一
- 一四七二
- 一四七三
- 一四七四
- 一四七五
- 一四七六
- 一四七七
- 一四七八
- 一四七九
- 一四八〇
- 一四八一
- 一四八二
- 一四八三
- 一四八四
- 一四八五
- 一四八六
- 一四八七
- 一四八八
- 一四八九

雲のゆくかたのおきやしくるらんやゝかけしめるあまのいさり火 一四九〇

述懐

神かせやみもすそ河にいのりおきし心のそこやにこらせりけむ 一四九一

そのかみのわかゝねことにかげせりし身のほとすくる老の波哉 一四九二

まちはつるふるえの藤のはるの日に楢の花をならへてそみる 一四九三

藤藤はからすよ世にありありあけの月にてふたゝひいそく鳥のはつこゑ 一四九四

たらちねのをよはすとまきあとすきて道をきはむるわかろうら入 一四九五

祝

鎌鎌吉 さまをいのるけふのたふとぞかくしこそおさまれる世はたのしきを

つめ

霜雪のしるかみまてはつかへきぬ若かやちよまいはひまくとて

世々ふともかはらぬ竹のふしておもひをきてそいのる若かよはひを

さみか世をいくよろつ世とかそへても何にたとへむあかぬ心は

ひさにふる三室のやまのさか木はそ月日はゆけというもかはらぬ

一四九六

一四九七

一四九八

一四九九

一五〇〇